

^{なが}長 ^{おき}沖 ^こ古 ^{ふん}墳 ^{ぐん}群 VI

— ^{だい}第32号 ^{ごう}墳 ^{ふん}の ^{ちょう}調査 ^さ —

2006

埼玉県本庄市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する本庄市と児玉町が、今年の1月10日に合併して早2カ月がたちました。この本庄市と児玉町は、当地域の長い歴史の過程で、地域社会の成熟に伴い地域的・行政的なまとまりとして分離し、隣接地として相互に関係性を持ちながらも、おのおの独自に発展してきた市と町であります。しかしながら、市や町ができる以前の、社会がまだ未熟で自然的条件に大きく影響されていたいにしえの時代には、古代児玉郡の領域にも窺えるように、南の上武山地からの湧水を集めて流れる金鑽川・旧赤根川・女堀川の水系を中心とした、もともとは上流と下流の一つの地域でありました。

当地域の歴史を鑑みる時、再び一つの地域となったことに感慨深いものがありますが、郷土の偉人でもあります塙保己一先生の「温故知新」の精神を深く敬愛しつつ、今後の新本庄市の発展を祈念する次第です。

本書は、埼玉県選定重要遺跡の長沖古墳群を代表する古墳の一つである第32号墳の範囲確認調査の報告書です。現地調査から本書刊行に至るまで、市民の皆様をはじめ、多くの関係機関や関係者の方々から、文化財保護に対する深いご理解と多大なご協力を賜りました。ここに感謝申し上げます。

平成18年3月10日

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、本庄市児玉町長沖303-1に所在する埼玉県選定重要遺跡長沖古墳群第32号墳（No54-139）の範囲確認調査の報告書である。
2. 古墳の番号は、行政的には埼玉県遺跡地図のNo54-139に該当するが、学術的には既報告の『長沖古墳群』（菅谷他1980）所載の「長沖・高柳古墳群分布図」の古墳番号が一般的に通用していることから、本報告においてもその番号を使用している。
3. 確認調査及び本書刊行に要した経費は、町費・国庫補助金・県費補助金である。
4. 範囲確認調査は、平成14年度に旧児玉町教育委員会が行い、同職員の大熊季広が担当した。
5. 本書の執筆は、第三章と第四章1を大熊が、第二章と第四章2を恋河内昭彦が行った。
6. 本書の編集は、恋河内が行った。
7. 本書作成にあたって下記の方々や機関からご助言・ご協力を賜った。記して感謝いたします。
赤熊浩一、出縄康行、岩瀬 讓、江原昌俊、大谷 徹、金子彰男、駒宮史朗、坂本和俊、篠崎 潔、外尾常人、田中広明、田村 誠、鳥羽政之、中沢良一、中村倉司、長井正欣、長滝歳康、西口正純、丸山 修、宮本直樹、矢内 勲、山崎 武、埼玉県生涯学習部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
8. 本報告の資料については、すべて本庄市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

第 I 章 調査に至る経緯 1

第 II 章 長沖古墳群の概要 3

第 III 章 調査の概要 7

第 IV 章 出土遺物の概要 30

1. 第3トレンチ出土遺物の概要 30

2. その他の出土遺物の概要 41

参考文献 48

写真図版

報告書抄録



第1図 遺跡の位置

第I章 調査に至る経緯

長沖第32号墳が位置する長沖古墳群(埼玉県選定重要遺跡)の東側区域(旧役場前通線以東)は、昭和49年度に計画された児玉南土地区画整理事業に伴い、昭和51年より区域内に所在する多くの古墳が随時発掘調査されている。現在土地区画整理事業地内で墳丘を持つ古墳として残っているのは、区域内北側の墳丘長が10m程度の円墳と推測される第30号墳と、墳丘長が35m～40m程度の前方後円墳とされる第31号墳・第32号墳の3基だけである。

前方後円墳とされる第31号墳と第32号墳の2基については、区画整理事業の計画当初から付近を公園として残す予定であったが、このうちの第32号墳の周辺については、事業の進展により公園用地として確保できる可能性が立ってきたことから、公園用地内に現状保存して将来古墳公園として整備する構想も考えられるようになった。しかしながら、この第32号墳は前方後円墳と言われるだけで、具体的な形態や規模及びその時期などその内容は一切不明であった。そのため、将来の保存構想に備えて、埼玉県選定重要遺跡の長沖古墳群を代表する古墳の一つでもある第32号墳の具体的な性格やその範囲を明らかにしておく必要が生じてきたため、平成15年度に区画整理に伴い古墳北側の道路(御沢地区)が発掘調査され、その敷地内から周溝の一部が検出されたのを機会に、古墳の墳形や周溝の範囲等を具体的に把握するため、墳丘外側に5ヶ所のトレンチを設定して範囲確認調査を実施することになった。(事務局)



第2図 長沖第32号墳周辺地形図



- 1 長沖古墳群 2 賀家上遺跡 3 長沖久保遺跡 4 長沖梅原遺跡 5 倉林東遺跡 6 倉林後遺跡 7 倉林後B遺跡 8 枇杷橋遺跡
 9 塩谷遺跡 10 塩谷下大塚遺跡 11 ミカド西遺跡 12 真鏡寺後遺跡・真鏡寺館跡 13 下原北遺跡 14 天田遺跡 15 前組羽根倉遺跡
 16 新羽根倉遺跡 17 西北原遺跡 18 中道遺跡第1地点 19 精進場遺跡 20 中道遺跡第2～24地点遺跡 21 安保氏館跡 22 巨樹原・檜下遺跡
 23 阿保境館跡 24 新宮遺跡 25 塚島遺跡 26 平塚遺跡 27 古井戸遺跡 28 将監塚遺跡 29 藤塚遺跡 30 今井川越田遺跡 31 一丁田遺跡
 32 地神・塔頭遺跡 33 今井条里遺跡 34 北廓遺跡 35 諏訪遺跡 36 夏目遺跡 37 西富田新田遺跡 38 社具路遺跡 39 後張遺跡
 40 川越田遺跡 41 梅沢遺跡 42 雷電下遺跡B地点 43 向田A遺跡 44 寺丁田遺跡 45 生野山遺跡 46 八幡山埴輪窯跡 47 雄ヶ岡城跡
 48 十二天遺跡 49 秋山塚原遺跡 50 秋山中山遺跡 51 虱薙神社前遺跡 52 羽黒山遺跡 A 飯倉古墳群 B 白岩古墳群 C 十二ヶ谷戸古墳群
 D 海老ヶ久保古墳群 E 二ノ宮古墳群 F 南塚原古墳群 G 北塚原古墳群 H 植竹古墳群 I 関口古墳群 J 元阿保古墳群 K 四軒在家古墳群
 L 大御堂古墳群 M 本郷古墳群 N 塚本山古墳群 O 生野山古墳群 P 下町古墳群 Q 広木大町古墳群 R 秋山古墳群

第3図 周辺の遺跡（君島・大谷1999より）

第Ⅱ章 長沖古墳群の概要

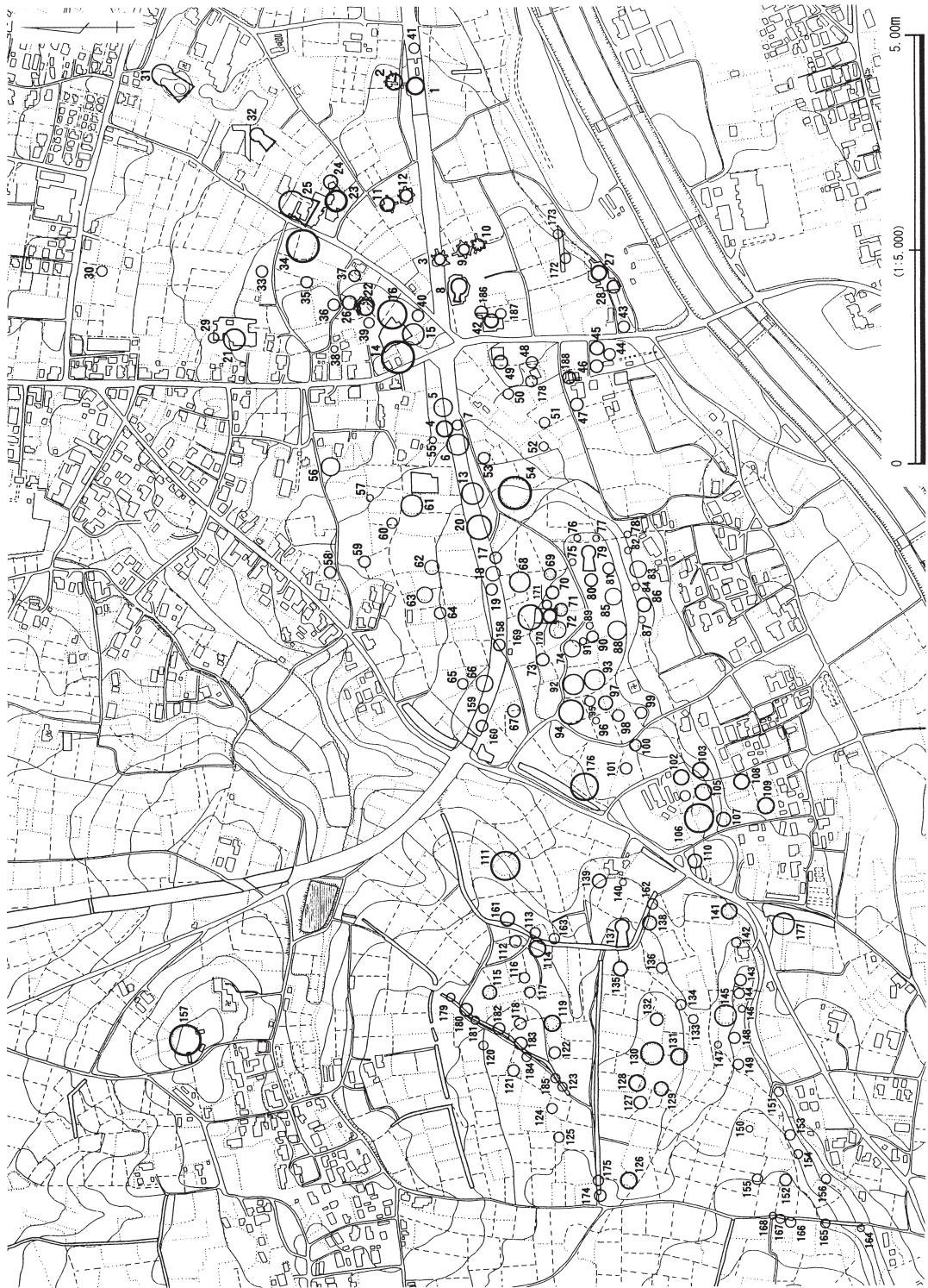
埼玉県選定重要遺跡の長沖古墳群は、本庄市児玉町の長沖から金屋・高柳の広範囲にわたって所在している。古墳群は、旧身馴川（現小山川）によって形成された段丘上の丘陵部先端付近から台地上にかけて、小山川に沿うような形で帯状に分布している。その広がり、北側に1基単独で離れて分布する第157号墳を除くと、東西約1700m・南北約500mである。

このような旧身馴川（現小山川）に沿って分布する古墳群は、中・下流域にも見られ、生野山残丘上の生野山古墳群（菅谷・駒宮1973、埼玉県1982）、大久保山残丘上の塚本山古墳群（増田・小久保他1977、鈴木他1978）、本庄台地北東端の西五十子古墳群（本庄市1986）、東五十子古墳群（本庄市1986、大田2002）などが列状に並んでいる。この複数の古墳群が列状に並んで分布する様相は、当地方の古墳群分布の特徴であり、他に本庄台地西側の神流川沿いを主とする青柳古墳群（城戸野・海老ヶ久保・植竹・二の宮・南塚原・北塚原・植竹・関口・元阿保・四軒在家支群）、大御堂古墳群、帯刀古墳群などの列、本庄台地北側の段丘縁辺付近を主とする旭・小島古墳群、北原古墳群、塚合古墳群、御堂坂古墳群、鶴森古墳群などの列が見られる。これらの地形的条件に沿って列状に並ぶ古墳群は、その地域的なあり方から見て、それぞれが墓域（奥津城）として集落が存在する生活域や耕作地が存在する生産域と対応するものと考えられ、古墳時代後期には当地方における旧身馴川（現小山川）以北の平野部が、大きく3つの領域に分かれていたことが窺える。そして、それぞれの古墳群列は、その3つの領域のそれぞれ縁辺部（境界）にあたるのではないかと思われる。

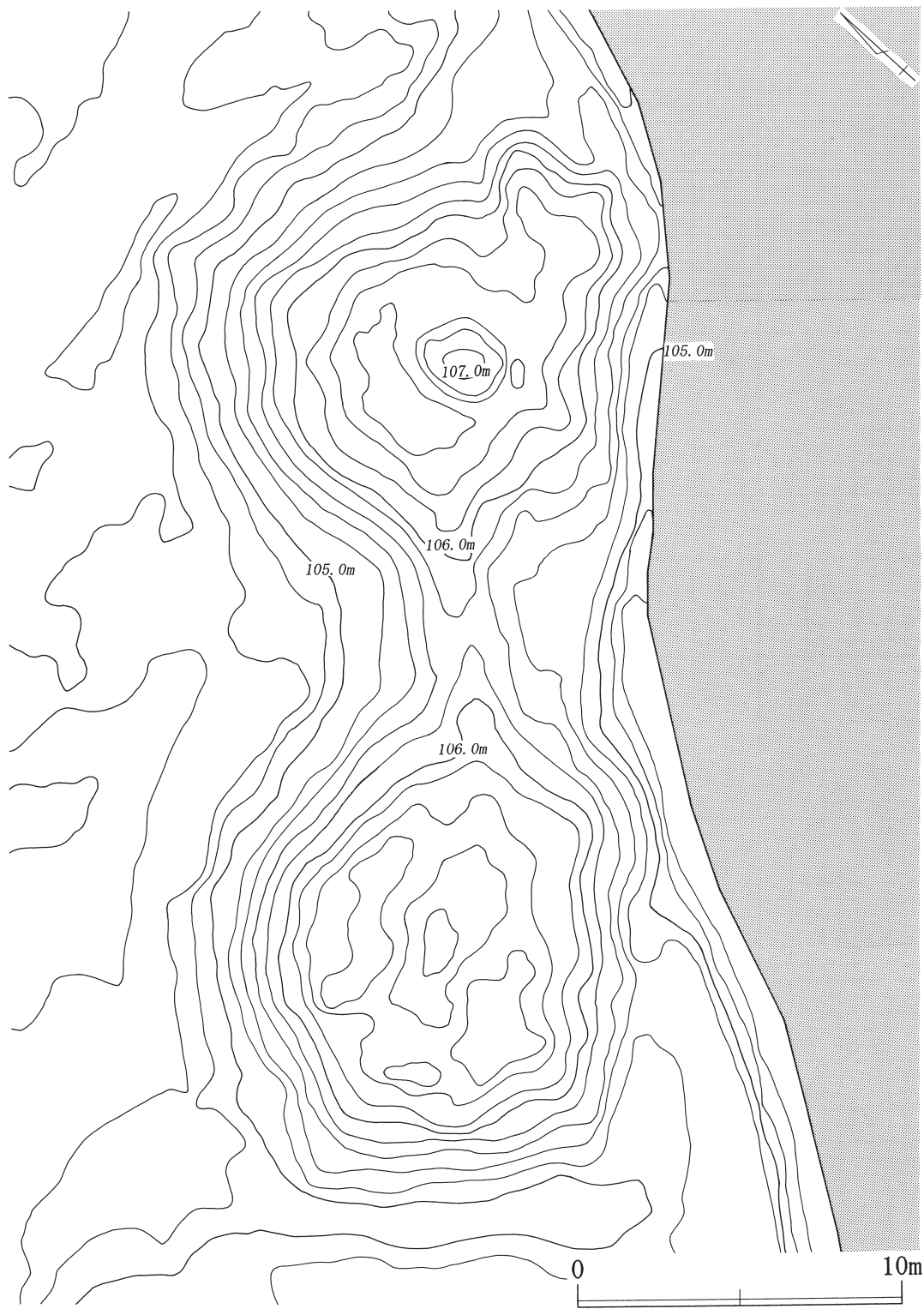
長沖古墳群は、すでに墳丘は削平されて消滅し、発掘調査によって周溝跡だけが確認された古墳も含めて、2003年までに188基が明らかになっている（第4図）。さらに最近長沖久保地区B地点の発掘調査で2基の古墳跡が検出されたことから、現在の確認総数は190基となる。これらの古墳は、県道76号線（児玉金沢秩父線）に沿って丘陵内に大きく深く湾入する谷により、地形的に東西に二分され、西側を「高柳支群」、東側を「長沖支群」と呼称している。この両支群内には、小規模な谷が高柳支群では東西方向に、長沖支群では北東方向に幾筋も入り込んでおり、その小規模な谷に沿って延びる丘陵部・台地部の尾根筋上に、古墳が列状に並ぶ複数の小支群に分けることが可能である。

長沖古墳群の形成は、前期古墳は未確認であるが、中期中頃から後半には確実に古墳が築造されはじめる。それらの古墳は、高柳支群の北側に単独で存在する第157号墳と長沖支群の第14号墳で、いずれもB種横ハケ調整の円筒埴輪をもつ30m級の円墳である。後期には、群構成の核的古墳として、前方後円墳が6～7基築造されているが、その大半は長沖支群に集中している。高柳支群は第137号墳だけで、墳丘長20m級の主軸を東西方向に向ける小規模な前方後円墳である。長沖支群は、東西の二群に分かれる。西側は、丘陵部の最高所付近に主軸を東西方向に向ける墳丘長30m級の第79号墳（十兵衛塚古墳）があり、西端の消滅した第110号墳も主軸を東西方向に向けた前方後円墳であったと言われている（菅谷他1980）。東側は、30m～40m級の北東方向に主軸を向ける第25・31・32号墳の3基が列状に並び、その南側に主軸方向を異にする20m級の帆立貝式前方後円墳の第8号墳がある。その後古墳群は、埴輪消滅以後の7世紀代まで小規模円墳が多く築造されている。

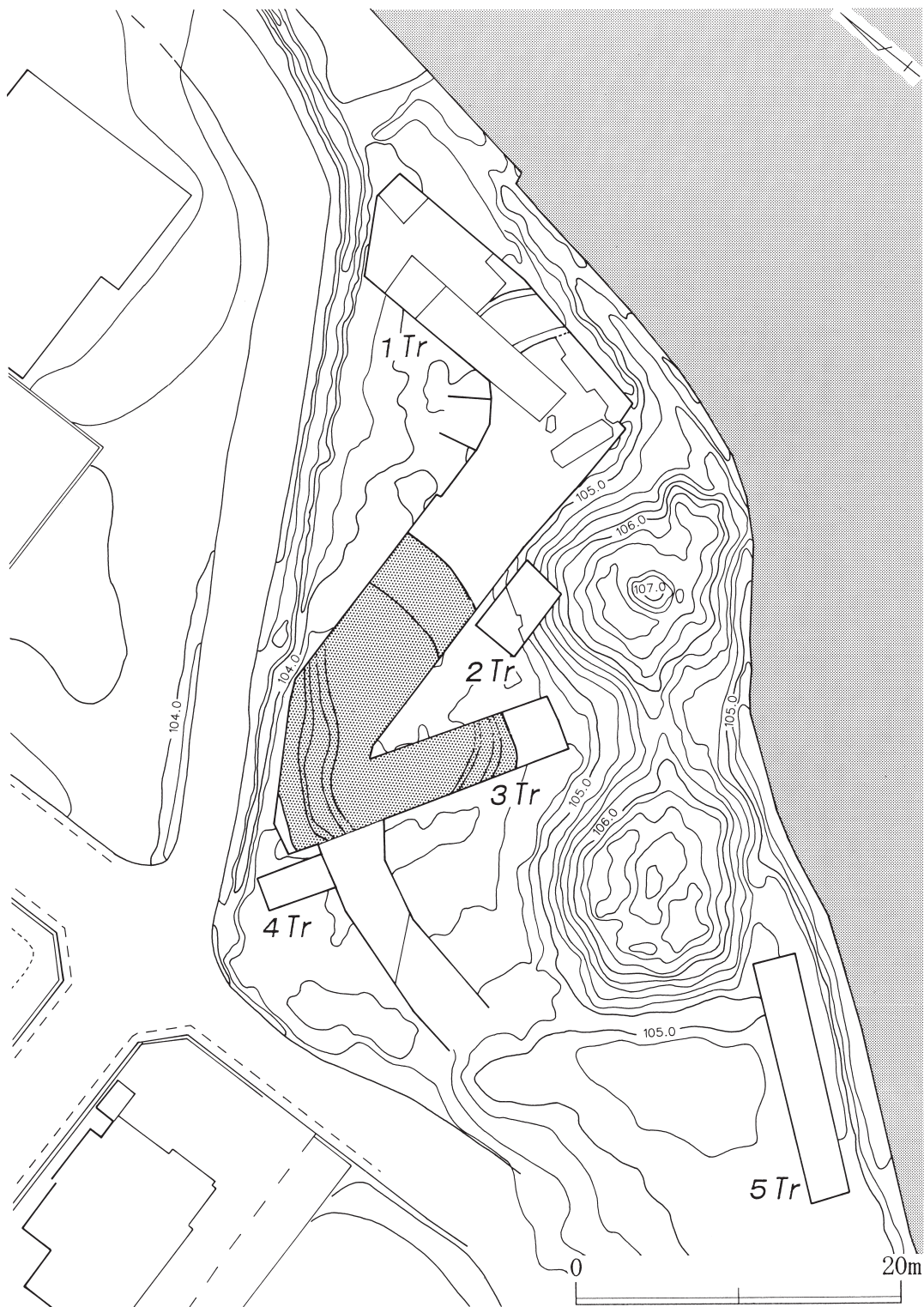
（恋河内昭彦）



第4図 長沖古墳群古墳分布図 (大熊2003より)



第5図 長沖第32号墳等高線図



第6図 トレンチ配置図

第三章 調査の概要

第1トレンチ（第7・8図、図版2-1・2）

第32号墳北側に位置する御沢地区では、墳丘北側を画する明確な周溝が検出されなかった。第1トレンチは、確認面である暗茶褐色土層（第3層）が、被覆土層である可能性も考慮され、その確認のために設定したものである。なお同トレンチでは、第1号溝跡が検出されているが、その掘削面は第2層である。第32号墳北側の墳丘裾部に相当する、御沢地区南壁における土層観察では古墳時代の旧表土が確認され、その層位的な位置は第1トレンチ第2層と第3層との間に相当している。このことから第1号溝跡には、より後続する時期が与えられるものである。

第1トレンチ第3層下の状況は、粘性を有する土層から砂質土層へと漸移的な変化を見せ、礫層に至る自然堆積層であった。このため第32号墳北側の周溝はより北側の調査区外に存在するか、或いは、当該調査区部分が橋状の未掘削部分に相当することが考えられる。

第2トレンチ（第7図、図版3-1・2）

第32号墳墳丘裾部の状況を把握するため、同墳北西部に設定した。

本トレンチでは、石垣状の石列が検出された。この石列は御沢地区においても確認され、その平面形態は圆弧状を呈するものである。石列の積み方は、小口を外側に向け、水平を基調とする部位も認められ、古墳築造に共通する要素を有するものの、長軸側の側面を外側に向けるものも見受けられる。この石列内側の土層には、浅間山系A軽石が認められることから、近世後半期以降の構築が考えられる。御沢地区においては、石列外側を巡る掘削上面幅50cm、底面幅35cmを測る根切り溝が確認されており、墳丘土や礫石の崩壊・流出を防ぐ目的で構築されたものと推定される。

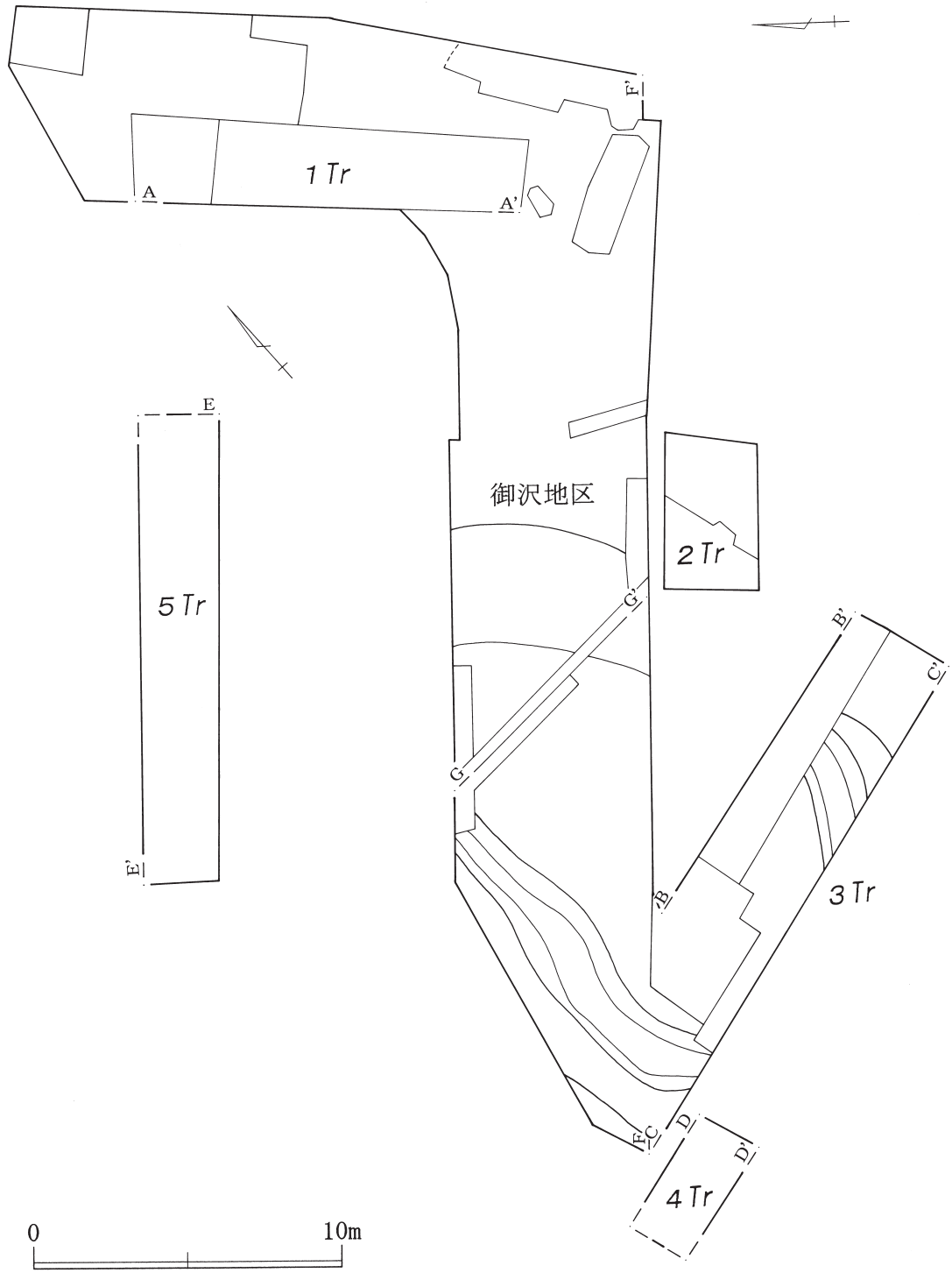
ここで注目されるのは、先述した平面形態である。周溝の埋没を考慮すれば、現状の墳丘規模は築造当時の規模より減じているものと考えられる。墳丘の崩壊・流失が、概ね均等に進行したものであるという仮定に立つならば、近世後半期以降に構築された石列の平面形態は、築造時の墳形の縮小された相似となる。したがって従来言われてきた、北東側が後円部に相当する「前方後円」という墳形（菅谷他1980）を考古学的に補強する材料となろう。

第3トレンチ（第7・9・10図、図版4～8）

御沢地区で検出された周溝の南側の状況を把握するため、括れ部に相当する部分と御沢地区を繋ぐ形でトレンチを設定した。

本トレンチでは、東側で周溝内側の立ち上がりがあり、西側においては周溝外側の立ち上がり確認された。周溝内側の立ち上がりでの平面プランは、北東方向から直線的に続く立ち上がりがあり、南西方向へと角度を変えていることが確認され、括れ部に相当することが判明した。

周溝内側立ち上がりの形態は、上位部分においては直線的であり、約45°の角度で下降し、緩やかに底面へと移行しており、明確な変換点を有さない。周溝外側の立ち上がりは、上位から中位部



第7図 第1～5トレンチ平面図

分は崩落しているが、遺存する下位部分の角度は60°を測り、内側に比較して急であることが指摘できよう。底面へは内側同様明確な変換点を持たず、緩やかに移行している。遺存する外側立ち上がり上端から2.20m付近で、一段下がる溝状の深部を有する。底面は、内・外側ともに直線的な平坦面を有し、一段下がる周溝中央の最深部に至っている。

周溝の規模は、立ち上がり上端で14.26mを、底面幅は約12mを測る。深さは現地表面から1.80mを測り、その掘削は基盤層である礫層に達していた。

覆土は、現地表面から約30cmが、浅間山系A軽石を含む暗褐色土層、以下標高102.80mまでが暗茶褐色粘質土を主体とする土層、さらに黒褐色を主体とする土層が堆積し、最下層は暗褐色粘質土に大別される。堆積の厚さは、暗茶褐色粘質土層は約1.20m、黒褐色土層は約20cm、最下層土は約20cmである。上位の暗茶褐色土層中には様々な夾雑物が観察されるが、その在り方は多寡が認められるものの均質である。ここで同層中の普通円筒埴輪片等に注目すると、その破断面は垂角状を呈していることが観察される。また黒褐色土上位には、浅間山系B軽石が観察された。最下の暗褐色粘質土は周溝立ち上がり基盤層の崩落により形成されたものである。

遺物の出土位置は、内側・外側の立ち上がり寄りに集中し、中央部分は希薄であった。特に外側においては、一段下がる溝状部分に集中するように遺物が検出された。またこれらの遺物は黒褐色土層上位に集中して検出された。検出された遺物は、普通円筒埴輪片および朝顔形埴輪片が主体であり、形象埴輪片、須恵器片は少量であった。

墳丘側で集中的に検出された遺物の堆積の角度は、墳丘側が高位に、周溝中央側が低位となっており、またこれらの遺物の破断面は未風化であり、かつ近接して検出された。このことから第32号墳に立て並べられていたものが周溝内に落ち込み、然程風雨にさらされること無く埋没した遺物と捉えることが出来よう。これに対し外側の溝状部分で検出された遺物は、小破片のものを主体としていた。

上記のような周溝内遺物の出土状況と層位および土層から、本墳の築造から古代を通しては、本古墳は比較的安定しており、周囲に立て並べられた埴輪も周溝内に落ち込むことなく元位置を保ち、一時崩落土である最下の暗茶褐色粘質土が堆積し、そして黒褐色土層が徐々に堆積していった状況であったことが窺える。このような堆積状況は、最下層が堆積した時点においては、墳丘上および周辺は、腐食が形成されない環境であったことを物語っており、また黒褐色土層堆積時には旧表土層の流入のみではなく、植生による落葉等の腐食の堆積される環境へと変化したことを示している。

祖霊の眠る奥津城である古墳、或いは群構成をとる一定の範囲が、燃料としての薪や堆肥原料の獲得地としての機能をも付加されていくとするならば、本源的か擬制的かはともあれ、古代におけるその子孫達により占有・管理された、合目的に植生に覆われた空間としての景観が想起されるものである。

しかし、天仁元（1108）年の浅間山爆裂の頃には、周溝内に遺物が落ち込むことから、墳丘裾部における状況が変化したことを示している。そして上位暗茶褐色粘質土を主体とする土層の堆積が始まるのである。この暗茶褐色粘質土は、墳丘下で観察された旧表土の下に存在する自然堆積層であり、本古墳周辺に普遍的に見られるものである。しかし周溝内の暗茶褐色土層の堆積は、約1.20mあり、その供給は基盤層の崩落だけではなく墳丘構築土に求められよう。

第32号墳の墳丘構築に用いられたと予測される土層は、基本土層から黒褐色土（古墳時代旧表土）・暗褐色粘質土・明褐色粘質土（基盤粘質土）、そしてさらに下位に自然堆積する黄褐色砂粒・黄褐色小礫等が考えられるが、周溝中位から上位に堆積する暗褐色年質土層においては、これらの個別の土層は把握されない。このことから、墳丘の一時的な崩壊による周溝の埋没ではなく、徐々に混ざり合いながら崩落・流入し、結果として上位暗茶褐色粘質土層を形成したものと考えられる。

なお御沢地区においては、上位暗茶褐色土最下位からおよそ10cm上から14世紀頃に比定される在産片口鉢の口縁部破片が検出されている。

この埋没土層の形成はまた、墳丘上の構築土層が流失しやすい露出した状態となったことを示すものであり、人為的な景観の変更が想起され、さらには従前の土地に対する意識と、概ね中世に相当する該期所有者の意識の、ある一定の乖離を示すものであろう。しかしながら、古墳そのものの消滅に至っていないことから、一義的な目的は周溝部分および墳丘上の裸地としての利用、すなわち耕地の獲得であったものと推定される。

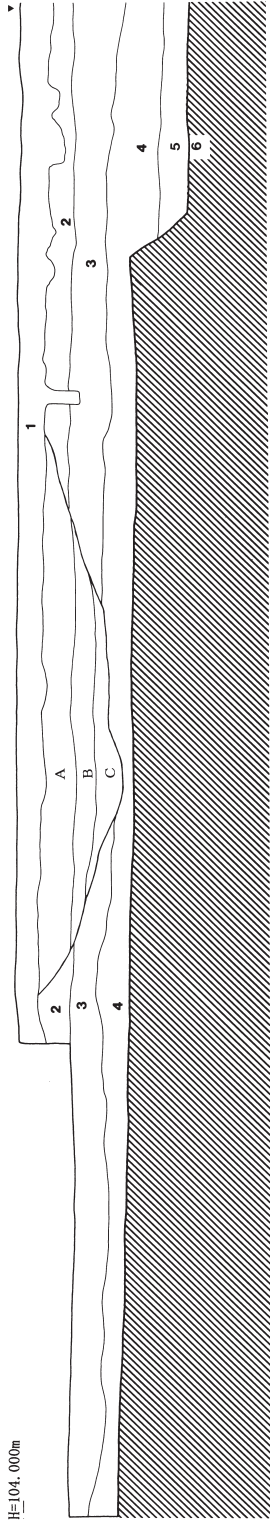
第4トレンチ（第7・11図、図版9-1・2）

周溝外側の立ち上がりの平面形態を把握するため、第3トレンチ南西に設定した。本トレンチから、周溝外側立ち上がりが、第3トレンチで確認された周溝内側立ち上がりに対応するように、南西方向へと続く状況が確認された。立ち上がりの角度は、第3トレンチで確認されたものに比べやや緩やかであるが、直線状であり弧状を呈しながら底面へと移行するものであった。

第5トレンチ（第7・12図、図版10-1・2）

第32号墳南側の規模を把握するため、本トレンチを設定し調査を行ったが、明確な周溝は確認されなかった。土層観察により第5・6層が周溝に相当する可能性も考慮された。同層中に含まれる礫石が均質に含まれ、耕作による攪拌が推定されるものであった。この耕作が、周溝下層の黒褐色土に及び、上層土層とともに攪拌されたとする解釈も成り立つ。しかしながらこの場合、前方部の周溝は御沢地区および第3・4トレンチにおいて検出された周溝規模と比較し、極めて貧弱であると言わざるを得ない。ここで第5・6層下に注目すると、第10層は非常に微細な黄褐色粘質土粒子の集合であり、且つ直下の砂礫層・第16層からの漸移的な変化が観察されるものである。このことから、第10層を最低面とする落ち込みは、第17・18層の堆積後に、河川流水による解析によって形成されることが推定されるものである。この落ち込みの再堆積層の礫の規模は、北側ほど大きく、南側に行くにしたがって小さくなっている。このことから、この落ち込みを埋没させる要因となった流水は、北側が強く、南側が弱いものであり、且つ、その流路は蛇行状を呈していたものであろう。第8・9・12層底面に注目すれば、その形態は明確な変換点を持たず、漸移的に連続するものである。この形態は御沢地区および第3・4トレンチにおいて検出された周溝と異なり、意識的な掘削ではなく、河川旧流路が埋没したものと解釈したほうが自然であると考えられる。ちなみに、第5・6層からは該期の遺物は検出されなかった。

本トレンチの調査から、本墳の墳丘南端は当該調査区南側になるものと推定される。（大熊季広）



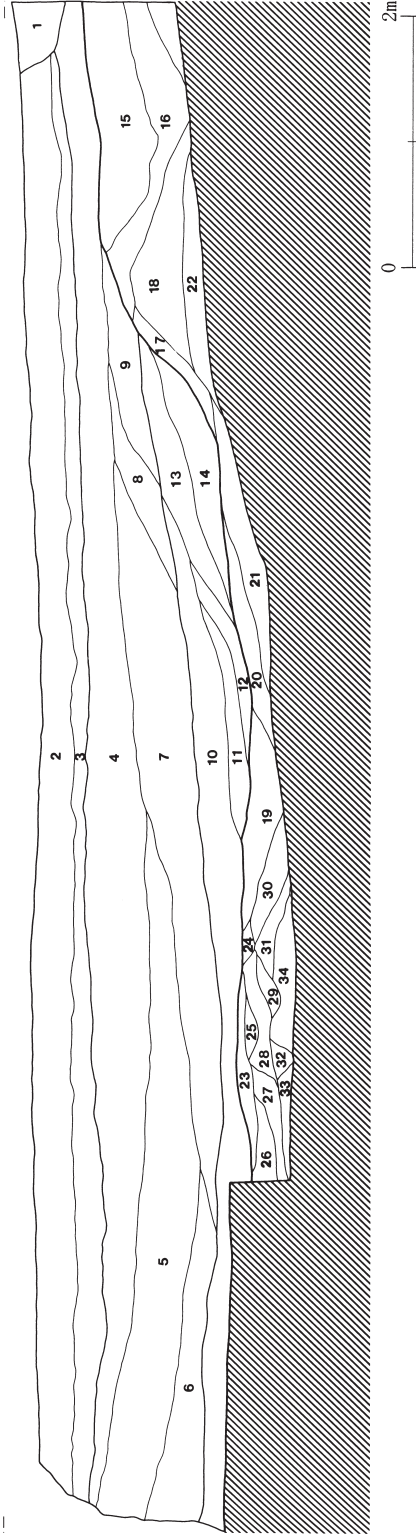
第8図 第1トレンチ土層A-A'

第1トレンチA-A' 土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石 (As-A・～2mm) を中量、小礫 (～1cm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性なし。<現耕作土>
- 第2層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8mm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～2mm) を中量均質に含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。本層からは、古墳時代須恵器壘破片が検出された。<旧耕作土>
- 第3層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8mm) を少量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。
- 第4層：明茶褐色粘質土層 明茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8mm) を微量含む。やや砂質である。しまりはやや硬く、粘性は低い。
- 第5層：明茶褐色砂質土層 明茶褐色砂質土を主体とする層。しまりはやや硬く、粘性なし。
- 第6層：暗黄褐色礫層 円礫・亜角礫 (～10cm) からなる層。

第1トレンチ第1号溝跡土層説明

- 第A層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8mm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～2mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。
- 第B層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～5mm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。
- 第C層：明茶褐色粘質土層 明茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8mm) を微量含む。層上位は色調が暗茶褐色に近い。しまりはやや硬く、粘性は低い。



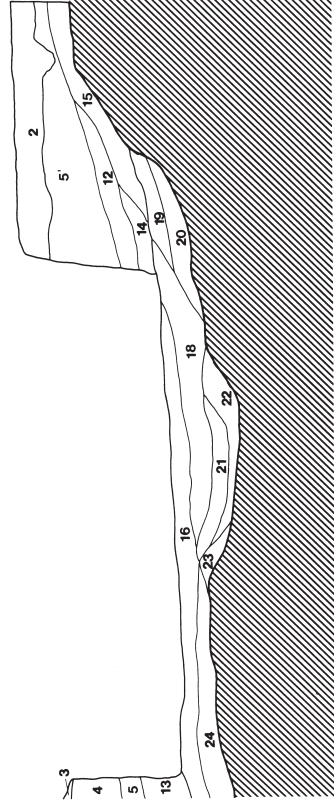
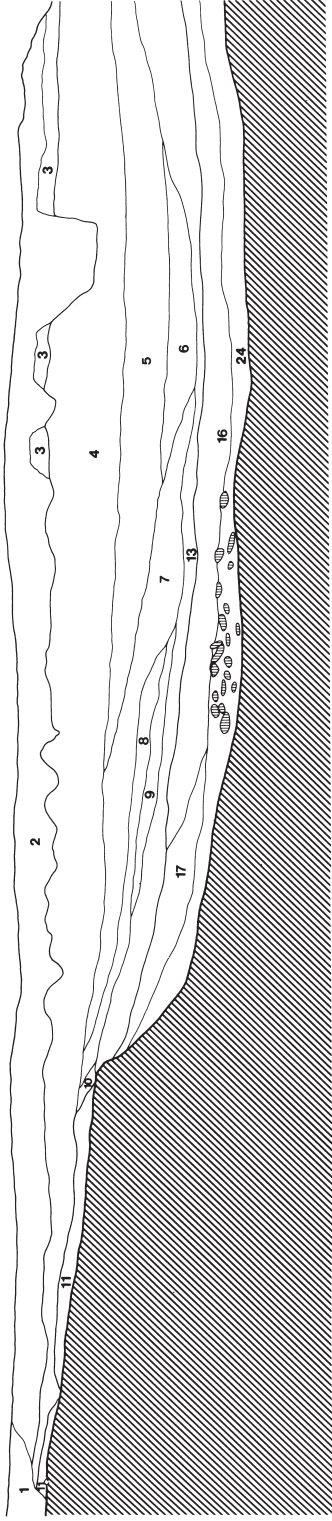
第9図 第3トレンチ土層B-B'

第3トレンチB-B' 土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石 (As-A・～2mm)・小礫 (～5cm) を中量含む。また、ビニール片等も含まれる。しまりは軟らかく、粘性なし。<根きり溝>
- 第2層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石 (As-A・～2mm) を多量に、小礫 (～1cm) を少量、炭化物粒子 (～5mm) を微量均質に含む。しまりは軟らかく、粘性なし。<現耕作土>
- 第3層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石 (As-A・～2mm) を多量に、小礫 (～5mm) を少量、炭化物粒子 (～5mm) を微量均質に含む。しまりは軟らかく、粘性なし。<旧耕作土>
- 第4層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～3cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第5層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～10cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第6層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～15cm)・埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第7層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～15cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第8層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子 (～0.1mm) を少量含み、色調がやや暗い。また小礫 (～5cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。

第9層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を少量含み、色調がやや暗い。また小礫（～5cm）を多量に、埴輪小片（～2cm）・炭化物粒子・焼土粒子（～1mm）を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第10層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、浅間山系B礫石（As-B・～1mm）を中量、小礫（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
 第11層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、暗褐色粘質土粒子（～0.1mm）を少量含み、色調はやや明るい。浅間山系B礫石（As-B・～1mm）・小礫（～7cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
 第12層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、礫（～15cm）を多量に含む。やや砂質である。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第13層：明褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂礫（～10cm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第14層：明褐色砂礫層 黄褐色砂礫（～15cm）を主体とし、暗褐色粘質土粒子（～0.1mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
 第15層：暗褐色砂礫層 黄褐色砂礫（～10cm）を主体とし、暗褐色粘質土粒子（～0.1mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
 第16層：暗褐色砂礫層 黄褐色砂礫（～8cm）を主体とし、暗褐色粘質土粒子（～0.1mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
 第17層：暗褐色砂礫層 黄褐色砂礫（～4cm）を主体とし、暗褐色粘質土粒子（～0.1mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
 第18層：黄褐色砂礫層 黄褐色砂礫（～6cm）を主体とする。しまりはやや硬く、粘性なし。
 第19層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、礫（～5cm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第20層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、礫（～5cm）を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第21層：暗褐色粘質土層 黄褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂礫（～5cm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第22層：黄褐色砂礫層 黄褐色砂礫（～2cm）を主体とする。しまりはやや軟らかく、粘性なし。
 第23層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～1cm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第24層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～3cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第25層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～1cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第26層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～1cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第27層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～5cm）を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第28層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～1cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第29層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～5cm）を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第30層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～5cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第31層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～5cm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第32層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～2cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第33層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～1cm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
 第34層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、礫（～5cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。

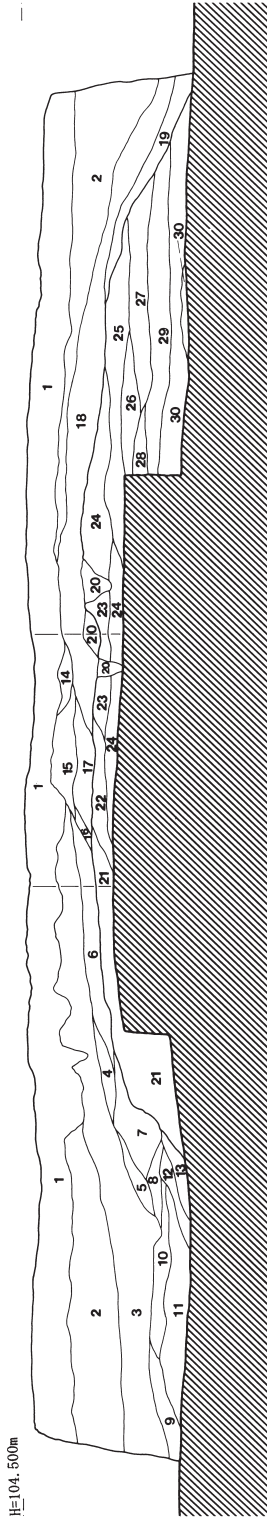
H=105.000m



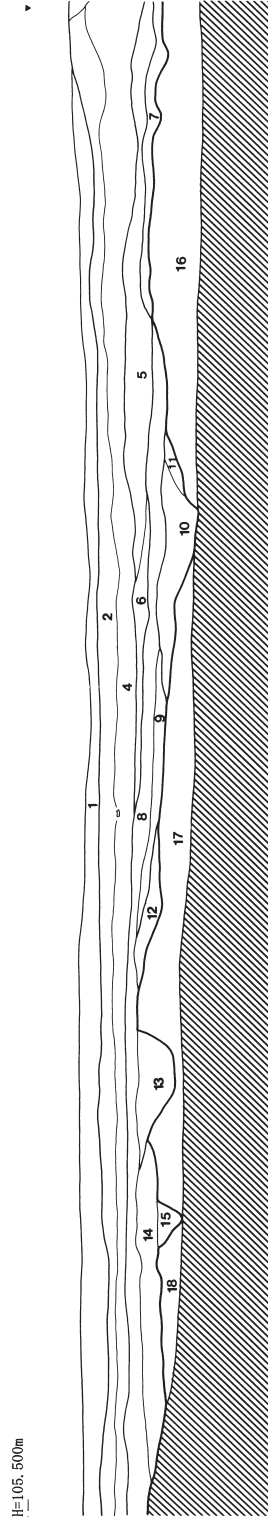
第10図 第3トレンチ土層C-C'

第3トレンチC・土層説明

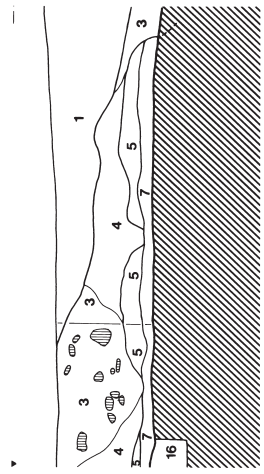
- 第1層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石 (As-A・～2mm)・小礫 (～5cm) を中量含む。また、ビニール片等も含まれる。しまりは軟らかく、粘性なし。<根きり溝>
- 第2層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石 (As-A・～2mm) を多量に、小礫 (～1cm) を少量、炭化物粒子 (～5mm) を微量均質に含む。しまりは軟らかく、粘性なし。<現耕作土>
- 第3層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石 (As-A・～2mm) を多量に、小礫 (～5mm) を少量、炭化物粒子 (～5mm) を微量均質に含む。しまりは軟らかく、粘性なし。<旧耕作土>
- 第4層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～3cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第5層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～10cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第5層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～4cm)・埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第6層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～2cm)・埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第7層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～15cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第8層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子 (～0.1mm) を少量含み、色調がやや暗い。また小礫 (～5cm) を中量、埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第9層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子 (～0.1mm) を少量含み、色調がやや暗い。また小礫 (～5cm)・埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第10層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子 (～0.1mm) を少量含み、色調がやや暗い。また小礫 (～3cm)・埴輪小片 (～2cm)・炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第11層：暗茶褐色砂礫土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、砂粒 (～4cm) を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。<旧表土に対応。>
- 第12層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (～4cm) を中量、炭化物粒子・焼土粒子 (～1mm) を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第13層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子 (～0.1mm)・小礫 (～2cm) を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第14層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子 (～0.1mm)・小礫 (～4cm) を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第15層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子 (～0.1mm) を少量、小礫 (～4cm) を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第16層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、浅間山系B軽石 (As-B・～1mm) を中量、小礫 (～2cm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。<大型破片遺物集>
- 第17層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、暗褐色粘質土粒子 (～0.1mm) を少量含み、色調はやや明るい。浅間山系B軽石 (As-B・～1mm)・小礫 (～7cm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 第18層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、暗褐色粘質土小塊 (～10cm) を中量含む。色調は明るい。浅間山系B軽石 (As-B・～1mm)・小礫 (～7cm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第19層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～10cm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第20層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～10cm)・砂粒 (～2mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第21層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8cm)・砂粒 (～2mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第22層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～2cm) を少量、砂粒 (～2mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。



第11図 第4トレンチ土層D-D'



第12図 第5トレンチ土層E-E'



- 第23層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～6cm）・砂粒（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第24層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を少量、円礫および扁平な礫（～20cm）・砂粒（～2mm）を中量含む。やや砂質である。しまりは軟らかく、粘性は高い。＜大型破片選物集中層＞
- 第19層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～10cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第20層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～10cm）・砂粒（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第21層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～8cm）・砂粒（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第22層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～2cm）を少量、砂粒（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第23層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、小礫（～6cm）・砂粒（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第24層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を少量、円礫および扁平な礫（～20cm）・砂粒（～2mm）を中量含む。やや砂質である。しまりは軟らかく、粘性は高い。＜大型破片選物集中層＞

第4トレンチD' 土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A層石（As-A・～2mm）・小礫（～5cm）を中量、小礫（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性なし。
- 第2層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫（～1cm）・埴輪細片（～1cm）・炭化物粒子・焼土粒子（～1mm）を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第3層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫（～1cm）・埴輪小片（～3cm）を中量、炭化物粒子・焼土粒子（～1mm）を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。
- 第4層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、砂粒（～0.5mm）・小礫（～1cm）・埴輪小片（～3cm）を中量、炭化物粒子・焼土粒子（～1mm）を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は砂質であるためやや低い。
- 第5層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を少量、砂粒（～0.5mm）・埴輪小片（～3cm）を中量、炭化物粒子・焼土粒子（～1mm）を少量均質に含む。色調はやや黒味を帯びる。しまりはやや軟らかく、粘性は砂質であるためやや低い。
- 第6層：暗黒褐色粘質土層 暗黒褐色土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）・砂粒（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は砂質のためやや低い。
- 第7層：暗黒褐色砂礫層 暗黒褐色土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）・砂粒（～0.5mm）を中量含み、黄褐色砂礫を小塊状に不規則含む。しまりは軟らかく、粘性は砂質のためやや低い。＜周溝外側立ち上がり崩壊堆積土層＞
- 第8層：暗黒褐色粘質土層 暗黒褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を中量、砂粒（～0.5mm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第9層：暗黒褐色粘質土層 暗黒褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を中量、砂粒（～0.5mm）を少量、小礫（～1cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第10層：暗黒褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）を中量、砂粒（～0.5mm）・小礫（～1cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第11層：暗黒褐色砂礫土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）・砂粒（～0.5mm）・小礫（～1cm）を中量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第12層：暗黒褐色砂礫土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）・砂粒（～0.5mm）を中量、小礫（～1cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第13層：暗黄褐色砂層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、黒味を帯びる砂質の暗茶褐色小塊（～1cm）を斑状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第14層：暗灰褐色粘質土層 第1層土と第15層土が混在する層。しまりは軟らかく、粘性は低い。＜耕作による第15層土の攪拌＞
- 第15層：暗褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、砂粒（～0.5mm）を中量、小礫（～2cm）を微量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
- 第16層：明褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、明褐色粘質土（第17層土）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
- 第17層：明褐色粘質土層 明褐色粘質土を主体とし、砂粒（～0.5mm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は砂質のためやや低い。

第18層：暗黒褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）・小礫（～10cm）を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
第19層：暗黒褐色粘質土層 暗褐色粘質土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.1mm）・暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を中量、小礫（～4cm）を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。

第20層：暗黄黒褐色砂質土層 第18層土と第23層土が混在する層。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第21層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）・小礫（～10cm）からなる層。小礫は片岩主体の円礫が主体をなす。しまりはなく、ザラザラしている。粘性なし。
第22層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～3cm）を少量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第23層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第24層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～4mm）を微量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第25層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～4cm）を少量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第26層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～4cm）を中量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第27層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～4mm）を微量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第28層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～4cm）を少量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第29層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第30層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。
第31層：暗黄褐色砂礫層 暗黄褐色砂粒（～0.5mm）を主体とし、小礫（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかい。粘性なし。

第5トレンチE'土層説明

第1層：黄褐色粘土層 黄褐色粘土を主体とする。＜エンマンジ瓦の粘土山からの流入層。＞

第2層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石（As-A・～2mm）・砂粒（～1mm）を中量均質に含む。しまりは軟らかく、砂質であるためザラザラしている。粘性なし。＜表土＞

第3層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、砂粒（～1mm）を中量均質に、浅間山系A軽石（As-A）（～2mm）・砂粒（～1mm）を中量、礫石（～20cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性なし。＜遺存する墳丘際の根切り溝＞

第4層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、砂粒（～1mm）を中量均質に、浅間山系A軽石（As-A）（～2mm）・暗茶褐色粘質土小塊（～1cm）（第5層土）を少量均質含む。しまりは軟らかく、粘性なし。

第5層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土小塊（～2cm）を少量、砂粒（～5mm）を中量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。

第6層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、黒褐色土小塊（～2cm）・砂粒（～5mm）を少量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性はやや高い。

第7層：黒茶褐色粘質土層 黒茶褐色粘質土を主体とし、砂礫（～2cm）を中量含む。しまりは硬く、粘性は高い。

第8層：黒茶褐色粘質土層 黒茶褐色粘質土を主体とし、砂礫（～1cm）を少量含む。しまりは硬く、粘性は高い。

第9層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、砂礫（～2cm）を少量含む。しまりは硬く、粘性は高い。

第10層：黄褐色粘質土層 黄褐色粘質土を主体とし、砂礫（～1mm）を微量含む。しまりは硬く、粘性は高い。

第11層：黄褐色粘質土層 黄褐色粘質土を主体とし、砂礫（～1cm）を中量含む。しまりは硬く、粘性は高い。

第12層：黒茶褐色土層 黒茶褐色土を主体とし、砂礫（～2cm）を中量含む。しまりは硬く、粘性は高い。

第13層：黒茶褐色粘質土層 黒茶褐色粘質土を主体とし、黄褐色粘質土粒子（～0.1mm）を少量含む、色調かやや明るい。また、砂礫（～2cm）を中量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。

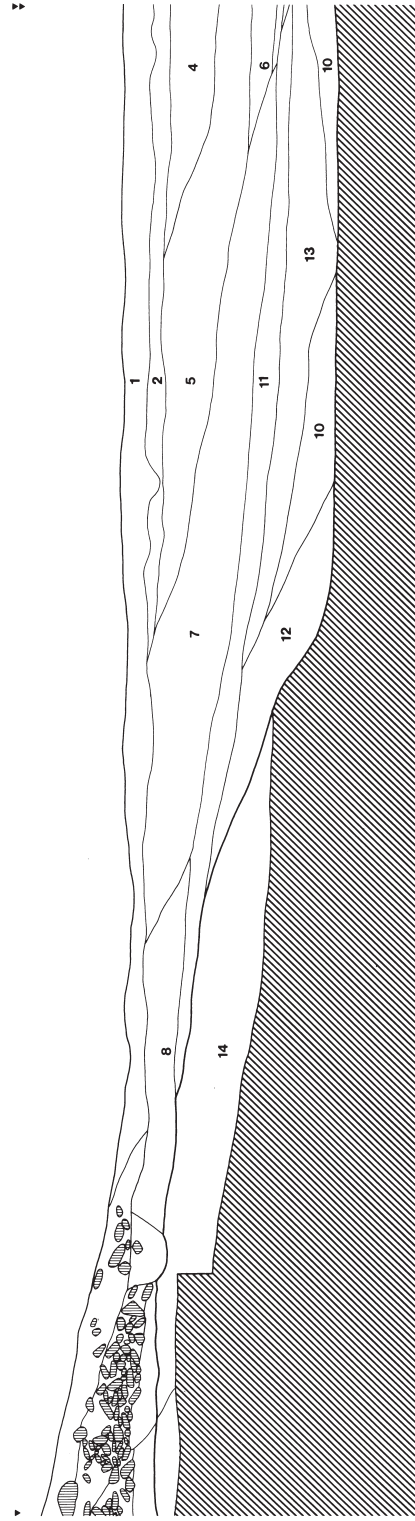
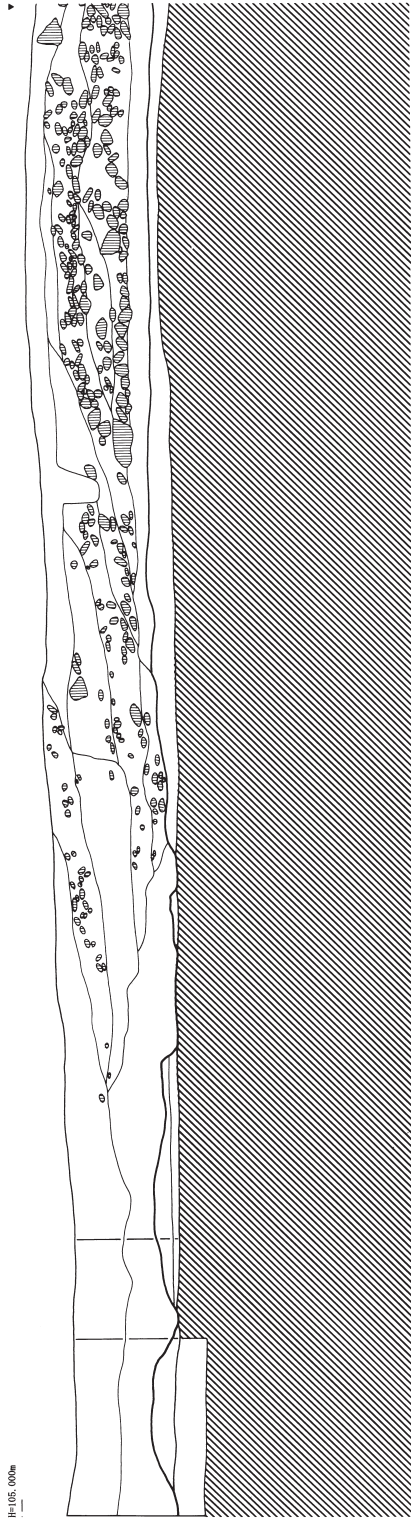
第14層：明茶褐色粘質土層 明茶褐色粘質土を主体とし、砂礫（～1cm）を中量含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。

第15層：明茶褐色粘質土層 明茶褐色粘質土を主体とし、砂礫（～1cm）を多量に含む。しまりは硬く、粘性はやや高い。

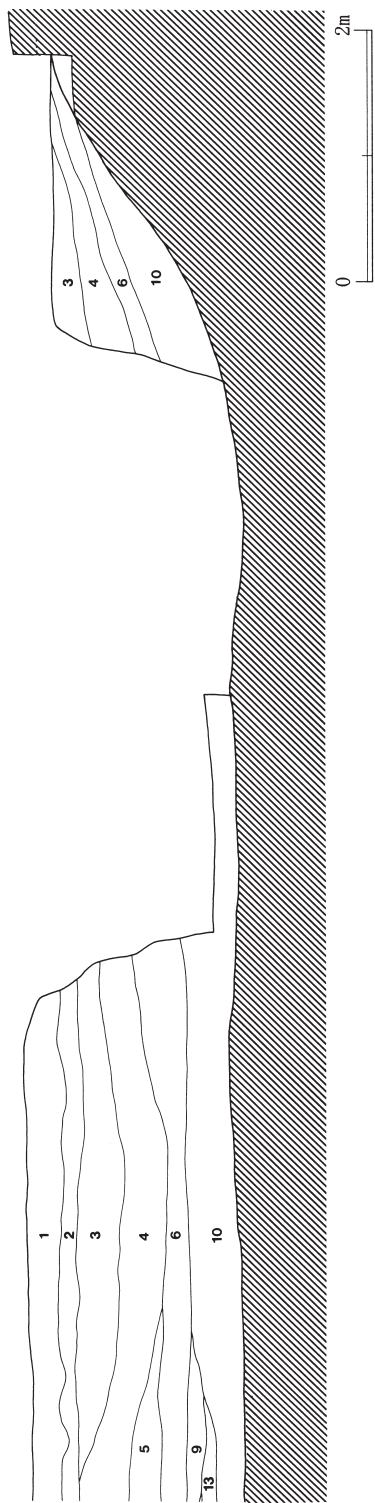
第16層：砂礫層 砂礫を主体とする層。南側ほど小さく（～1cm）、北側へ行くにつれ、大きくなっていく（～10cm）。しまりは硬く、粘性なし。

第17層：砂礫層 砂礫を主体とする層。礫石はほぼ均一である（～4cm）。しまりは硬く、粘性なし。

第18層：砂礫層 砂礫を主体とする層。南側は砂粒（～2mm）からなり北側へ行くにしたがい、礫石へと変化する（～4cm）。しまりは硬く、粘性なし。



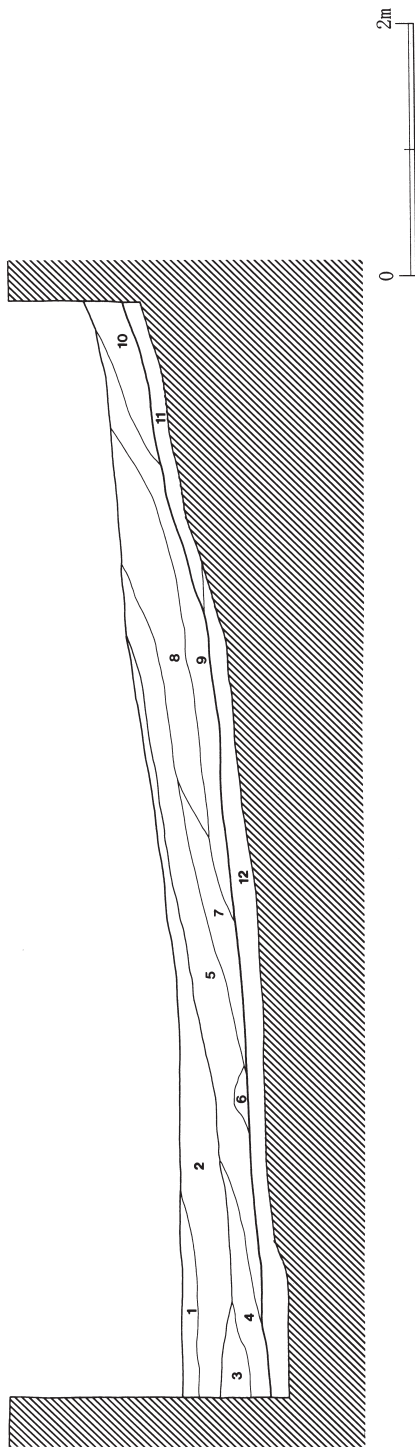
第13図 御沢地区土層F-F' (1)



第14図 御沢地区土層F-F' (2)

御沢地区F-F'土層説明

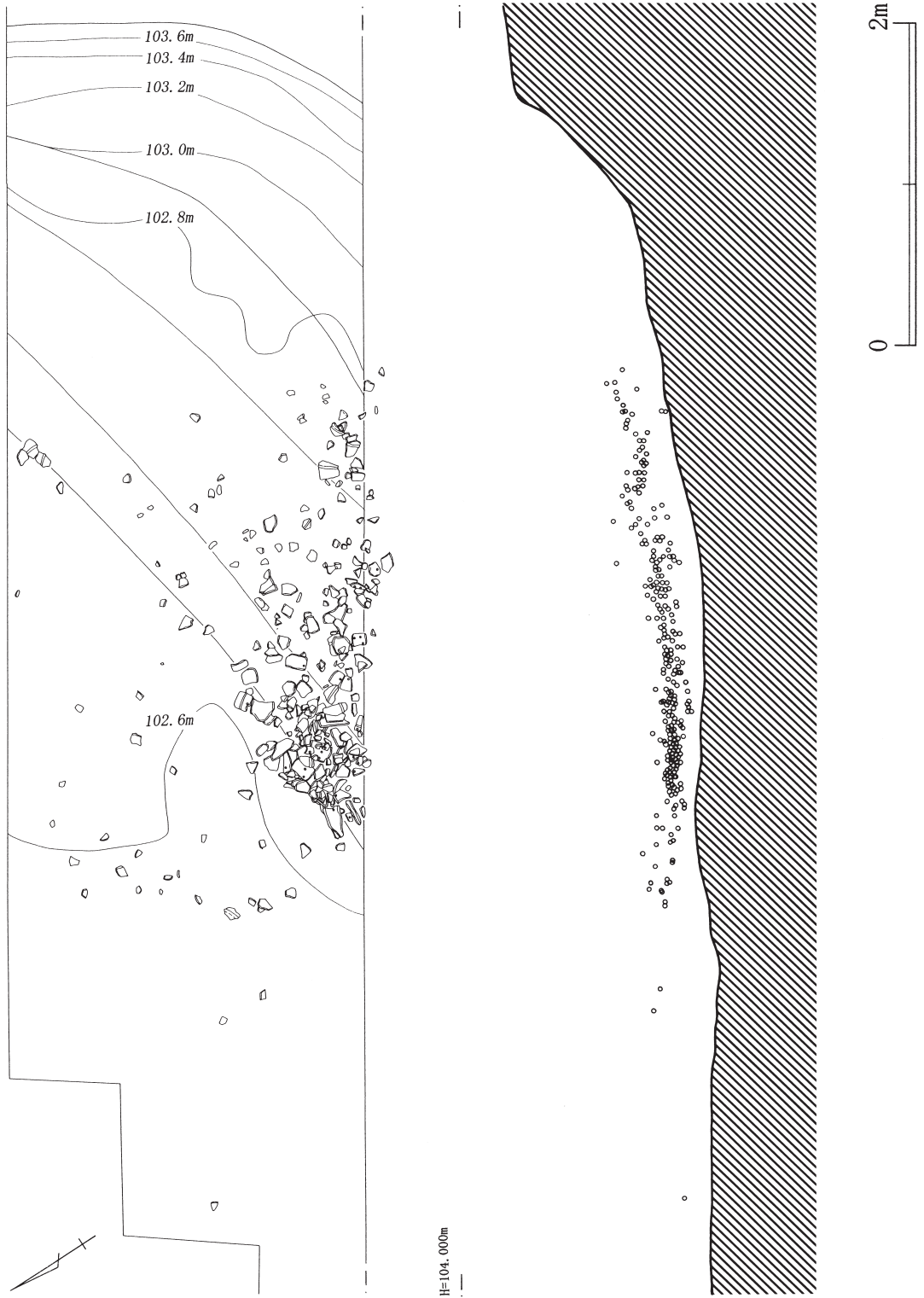
- 第1層：暗灰褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系As-A (~2mm)、砂粒 (~1mm) を中量均質に、小礫 (~2cm) を微量含む。砂質であり、しまりは軟らかく、サラサラしている。粘性なし。<耕作土>
- 第2層：暗灰茶褐色土層 暗灰褐色土を主体とし、暗茶褐色粘質土を少量含む。浅間山系As-A (~2mm)、砂粒 (~1mm)、及び小礫 (~2cm) を中量均質に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (~2cm)、埴輪細片 (~1cm) を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第4層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、小礫 (~4cm) を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第5層：暗茶褐色粘質土層 第4層に準ずるが、小礫・埴輪細片がやや多い。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第6層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色土を主体とし、小礫 (~4cm)、埴輪片 (~4cm) を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第7層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色土を主体とし、小礫 (~4cm) を中量、埴輪片 (~4cm) を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第8層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色土を主体とし、小礫 (~1cm) を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第9層：暗茶褐色粘質土層 暗茶褐色粘質土を主体とし、砂粒 (~2mm)、小礫 (~8mm) を中量含む。黒色土粒子が混入するものと思われる。
- 第10層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、小礫 (~1cm) を少量、浅間山系B軽石 (~0.5mm) を中量含む。埴輪片 (~2cm) を微量含む。
- 第11層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、礫石 (~8cm)、小礫 (~1cm)、砂粒 (~1mm)、B軽石 (~0.5mm) を中量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第12層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、小礫 (~2mm) を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第13層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、砂粒 (~2mm)、B軽石 (~0.5mm) を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。
- 第14層：黒褐色土層 黒褐色土を主体とし、礫石 (~8mm)、小礫 (~2cm)、砂粒 (~0.5mm) を多量、B軽石 (~2mm) を少量含む。しまりはやや硬く、粘性はやや高い。



第15図 御沢地区土層G-G'

御沢地区G-G'土層説明

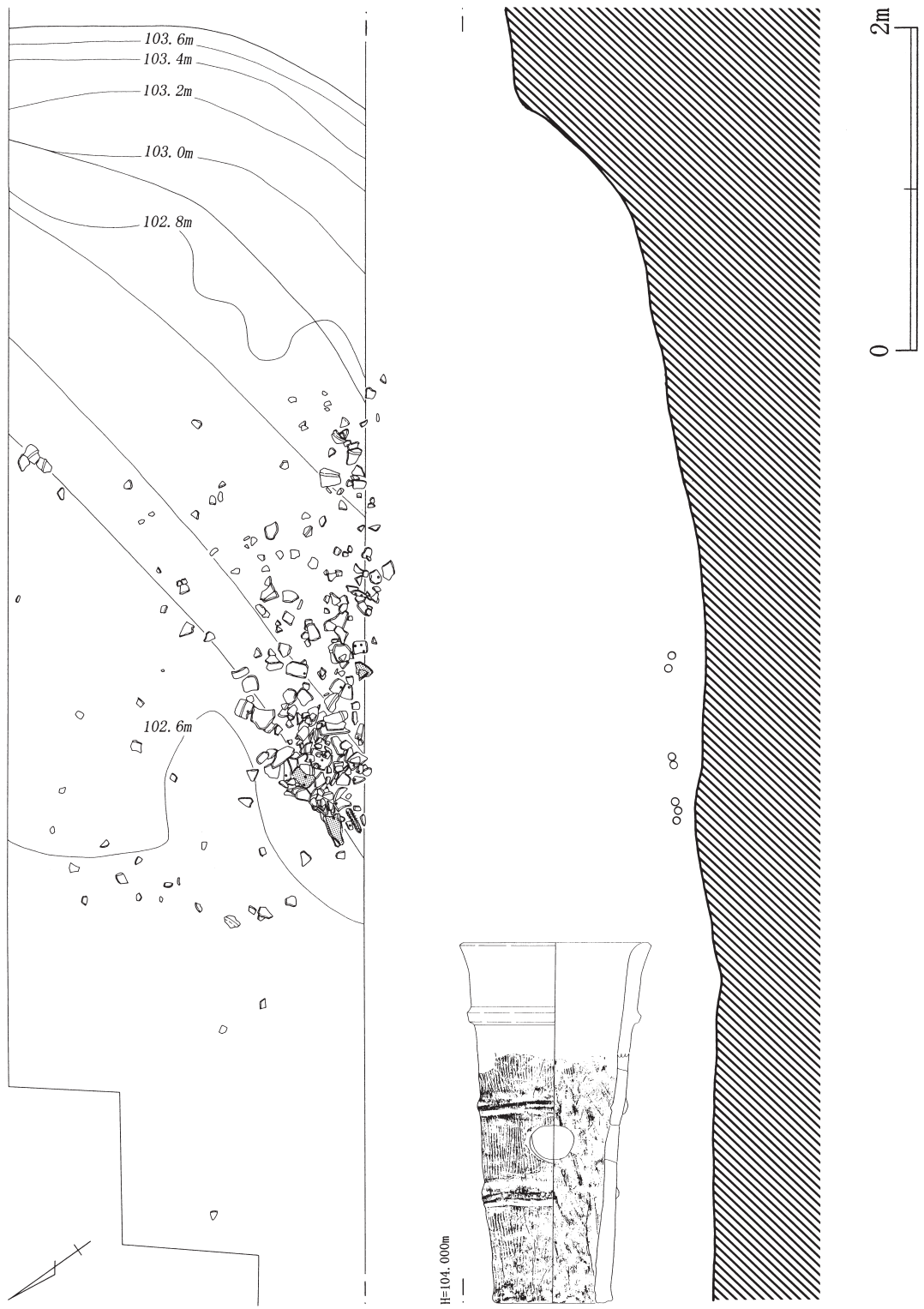
- 第1層：黒褐色土を主体とし、浅間山系B軽石 (As-B・～1mm)・小礫 (～2cm) を少量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は低い。
- 第2層：黒褐色土を主体とし、浅間山系B軽石 (～1mm)・小礫 (～5cm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層：暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～5cm) を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第4層：暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～3cm) を少量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第5層：暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8cm)・砂利 (～2cm) を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第6層：暗褐色粘質土を主体とし、砂利 (～2cm) を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第7層：暗褐色粘質土層。小礫が傾斜を有する面をなし、分層が可能。一定の安定状態を看取できる。
- 第8層：暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～10cm) を少量・砂利 (～2cm) を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第9層：暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～8cm)・砂利 (～2cm) を多量に含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第10層：暗褐色粘質土を主体とし、小礫 (～15cm) を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性は普通。
- 第11層：暗褐色小礫 (～2cm) を主体とし、小礫 (～5cm) を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性なし。＜基盤層＞
- 第12層：暗褐色小礫 (～2cm) を主体とし、小礫 (～5cm) を中量含む。しまりはやや軟らかく、粘性なし。＜基盤層＞



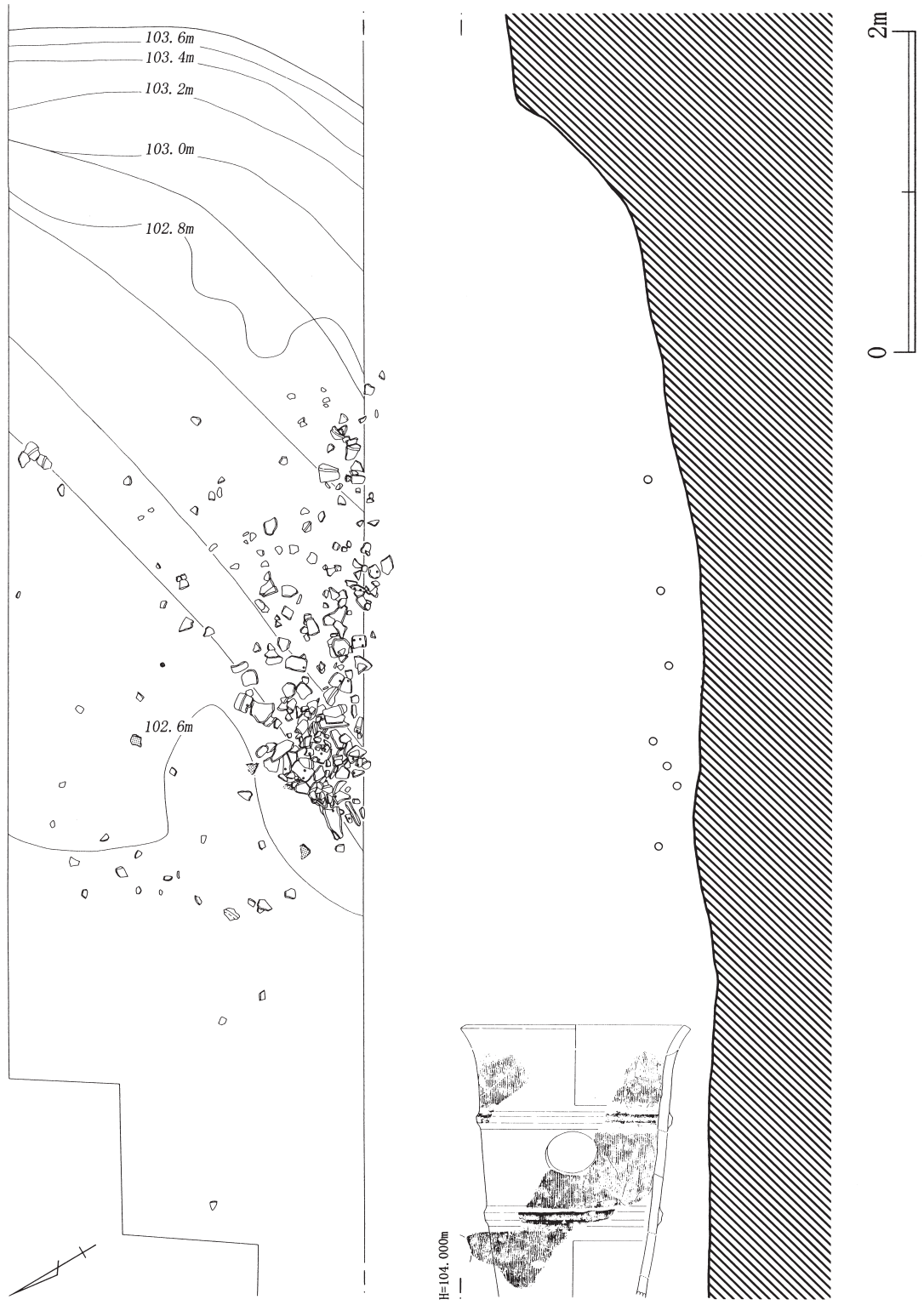
第16図 第3トレンチ埴輪出土状態 (全体)



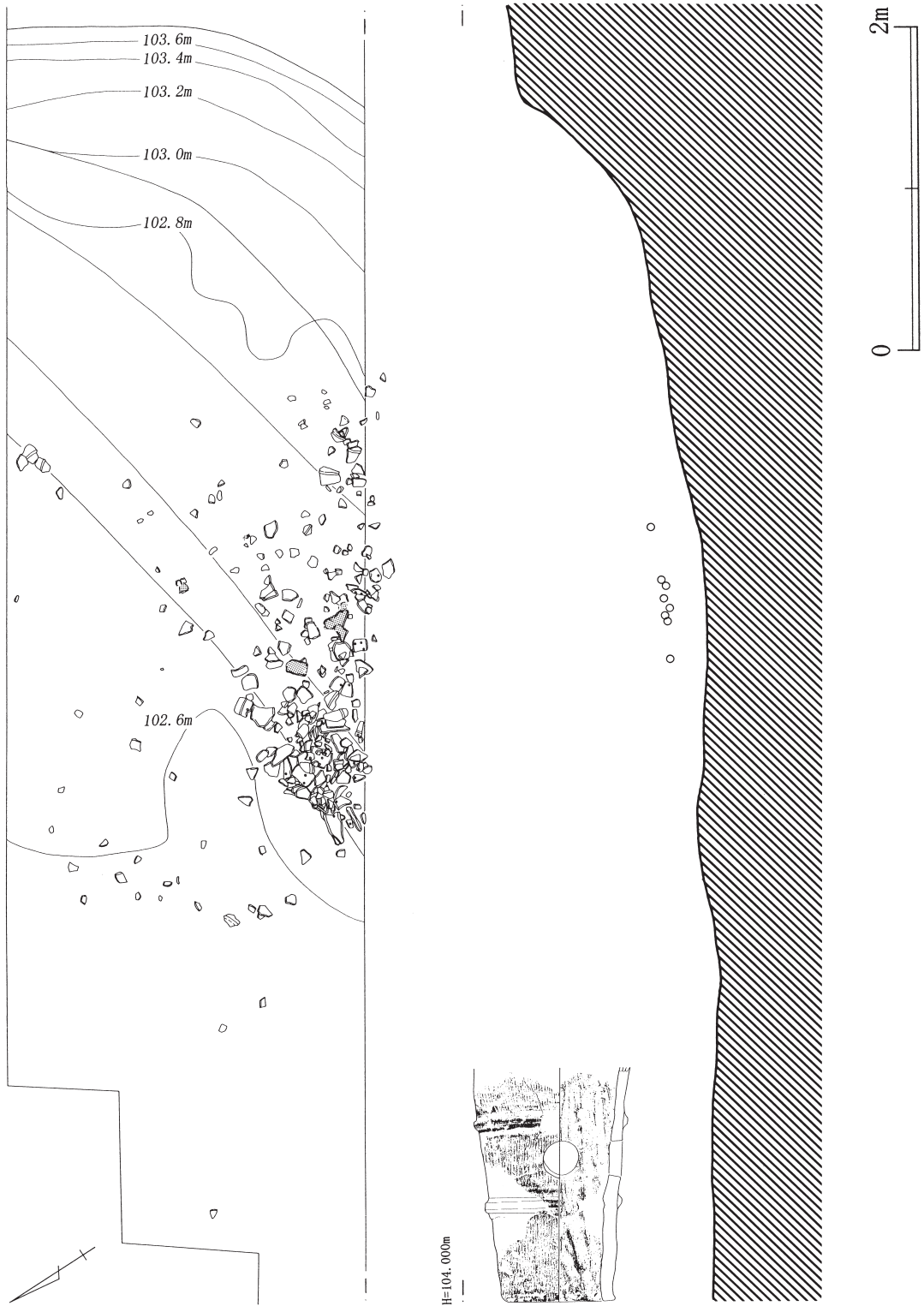
第17図 第3トレンチ円筒埴輪No1出土状態



第18図 第3トレンチ円筒埴輪No2出土状態



第19図 第3トレンチ円筒埴輪No3出土状態



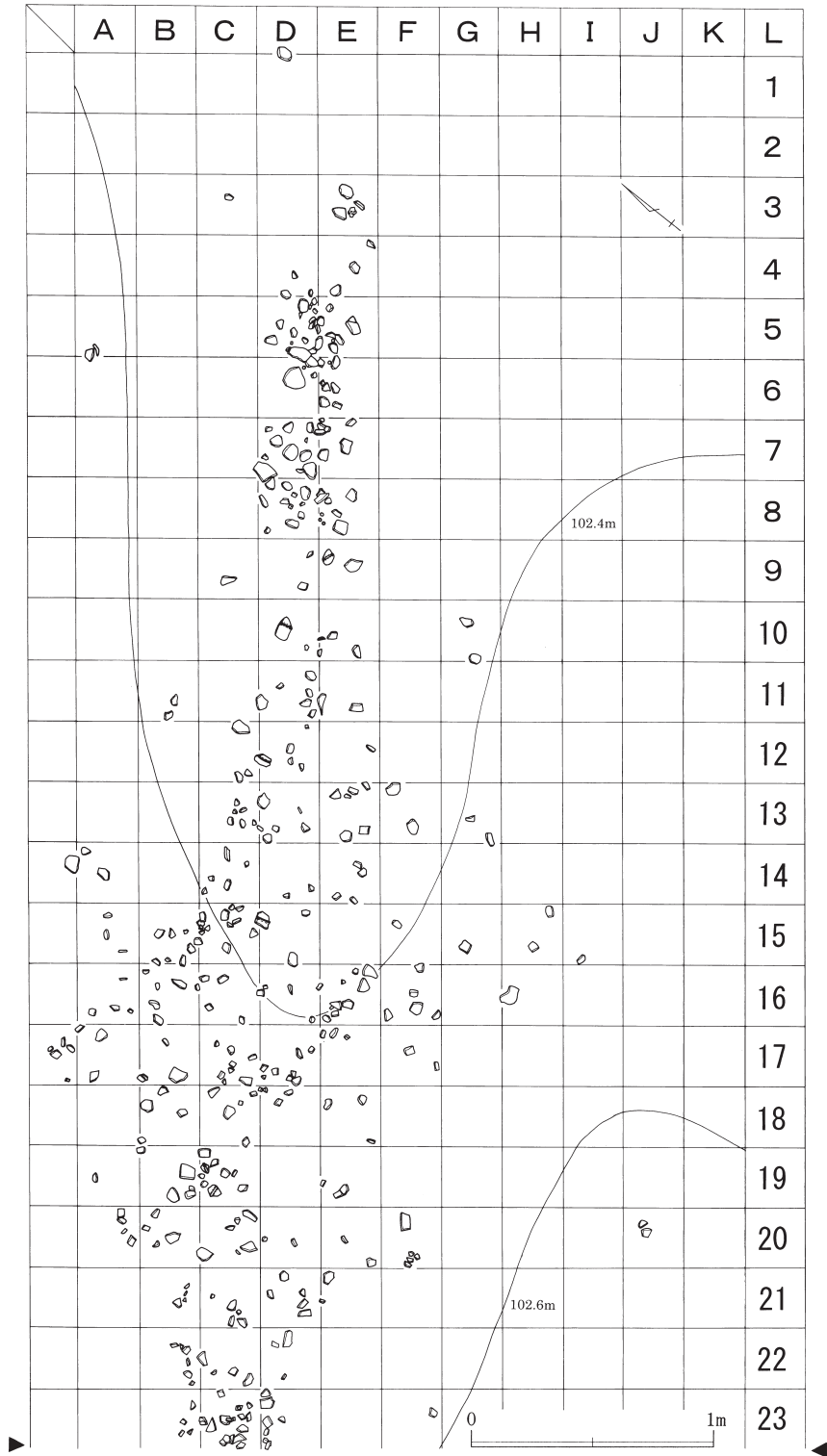
第20図 第3トレンチ円筒埴輪No4出土状態



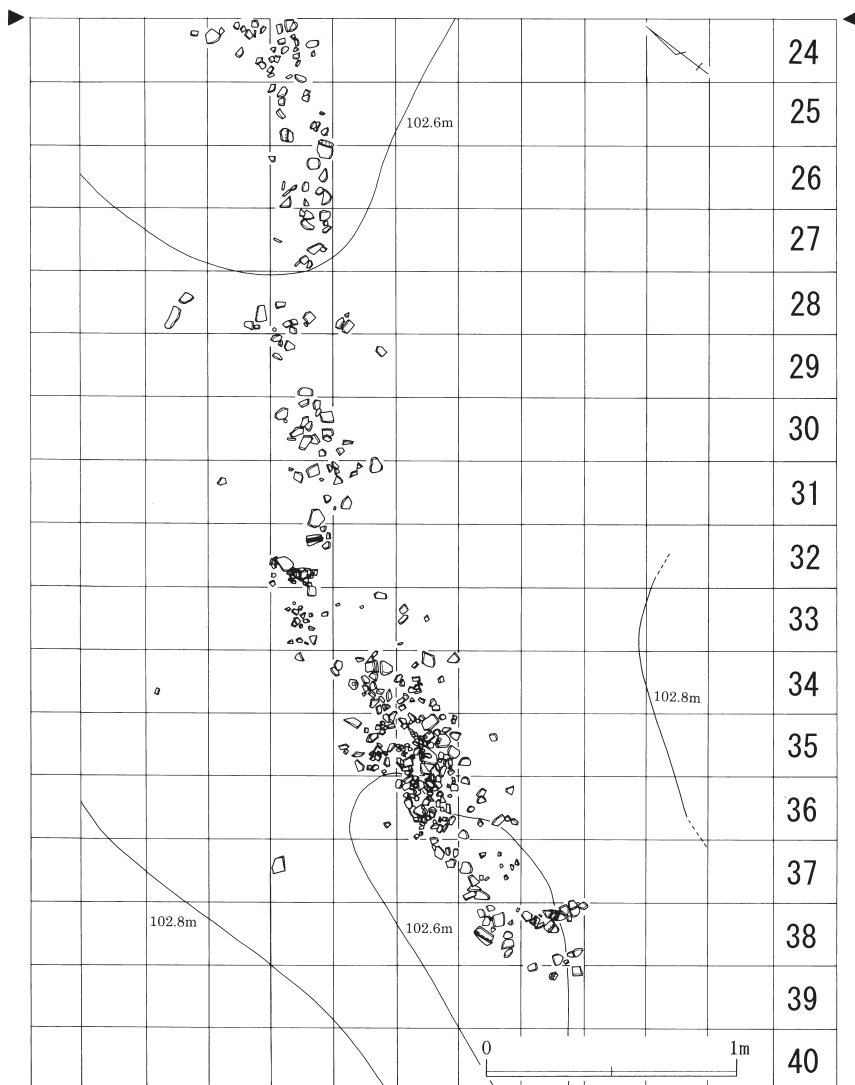
第21図 第3トレンチ円筒埴輪No6出土状態



第22図 第3トレンチ朝顔形埴輪No7出土状態



第23図 御沢地区～第3トレンチ遺物出土状態（1）



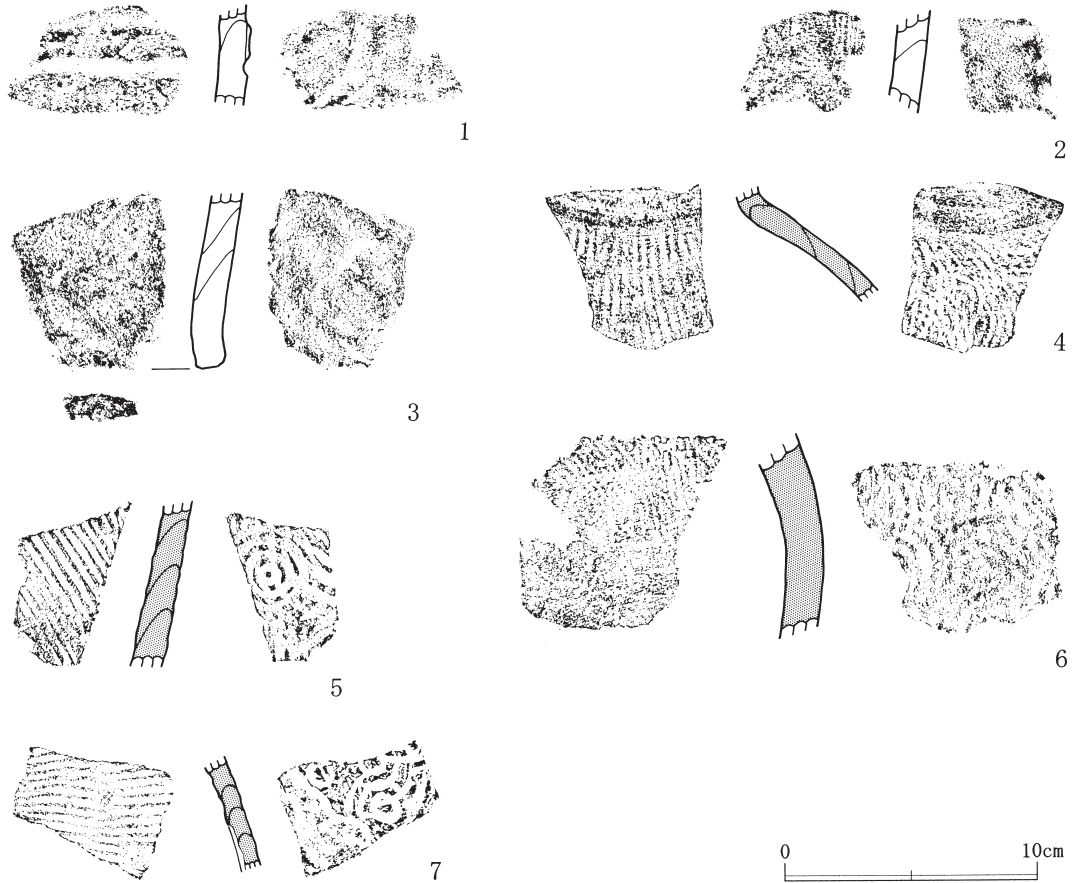
第24図 御沢地区～第3トレンチ遺物出土状態（2）

第IV章 出土遺物の概要

1. 第3トレンチ出土遺物の概要

ここでは今回得られた資料のうち、確実に第32号墳に帰属が求められる、第3トレンチ周溝内の墳丘側から検出された遺物(第26～33図)について記載する。

No. 1 は、器高44.0cm、口縁部直径26.2cm、底部直径14.3cmを、また第1凸帯までの高さは12.5cmを測り、1段長／器高比は28.4%である。口端部は面状を呈し、口唇部は緩やかに外反する。凸帯部断面形態は中央部が窪む台形状を呈する。底部外端部は、やや外側に突出し、底部調整は施

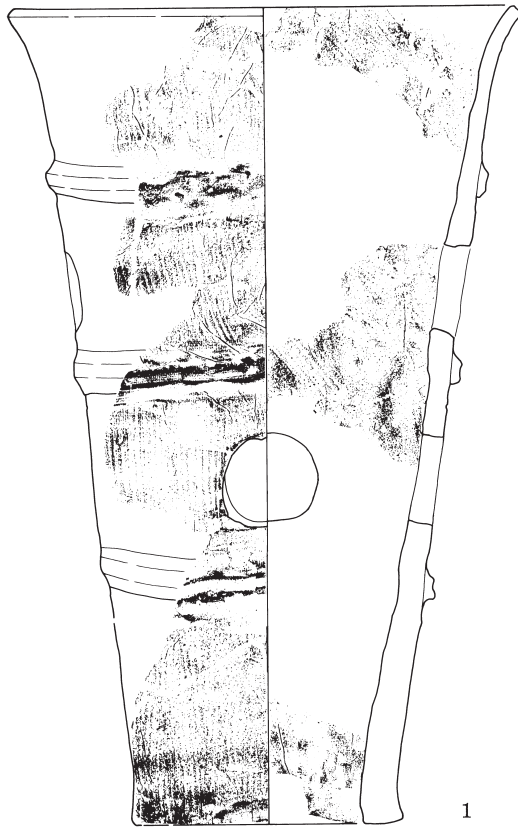


第25図 第2トレンチ出土遺物

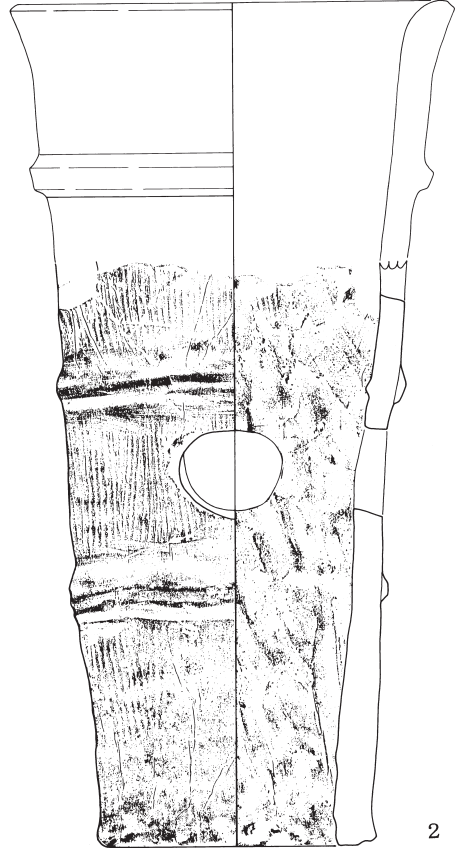
されていない。器表面の調整は、外面が縦位刷毛目調整であるが、第2凸帯の上位に縦位刷毛目がかぶる部位が見受けられることから、上半部と下半部での調整工程に時間差を見出せよう。内面調整は底部から第2凸帯部付近までが縦位のナデ、より上位は斜位の刷毛面が施されている。口唇部は内外ヨコナデが施されている。第2段および第3段に2孔1対の円窓が、90°角度を異にするように穿たれている。刷毛目ピッチは1cmあたり3本を数える。

No. 2は、底部から第3段までの破片であるが第3段に円弧状の透孔が認められることから3条4段の普通円筒埴輪と考えられるものである。残存器高31.2cm、底部径14.6cmを測る。凸帯部断面形態は中央部が窪む台形状を呈する。底部外端部は、やや外側に突出し、底部調整は施されていない。器表面の調整は、外面が縦位刷毛目調整であるが、No. 1と同様に第2凸帯の上位に縦位刷毛目がかぶる部位が見受けられることから、上半部と下半部での調整工程に時間差があるものと考えられる。内面調整は底部から第2凸帯部付近までがやや角度を持った縦位のナデ、より上位は斜位の刷毛面が施されている。

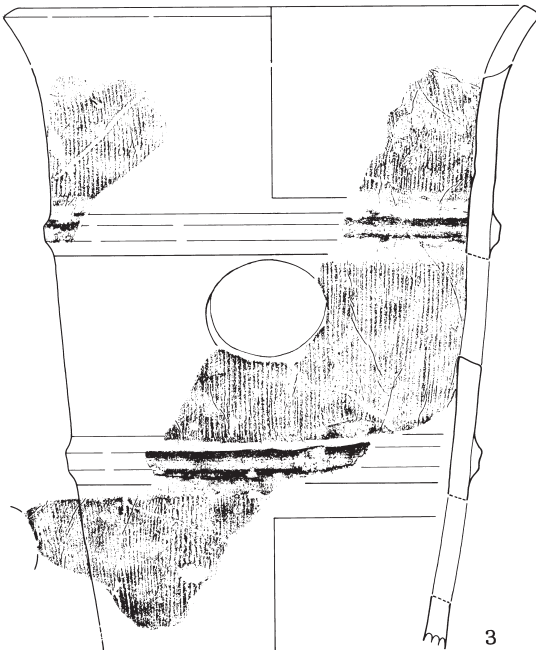
No. 3は、口唇部から胴部下位にかけての破片である。口縁部下の段と更に下位の段に弧状の透



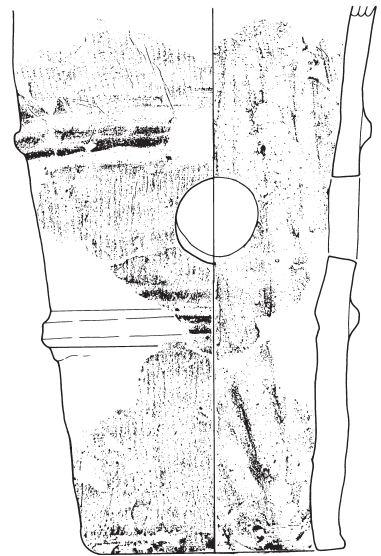
1



2



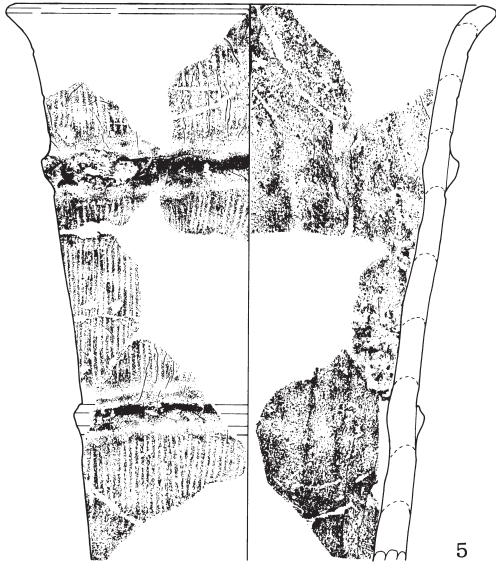
3



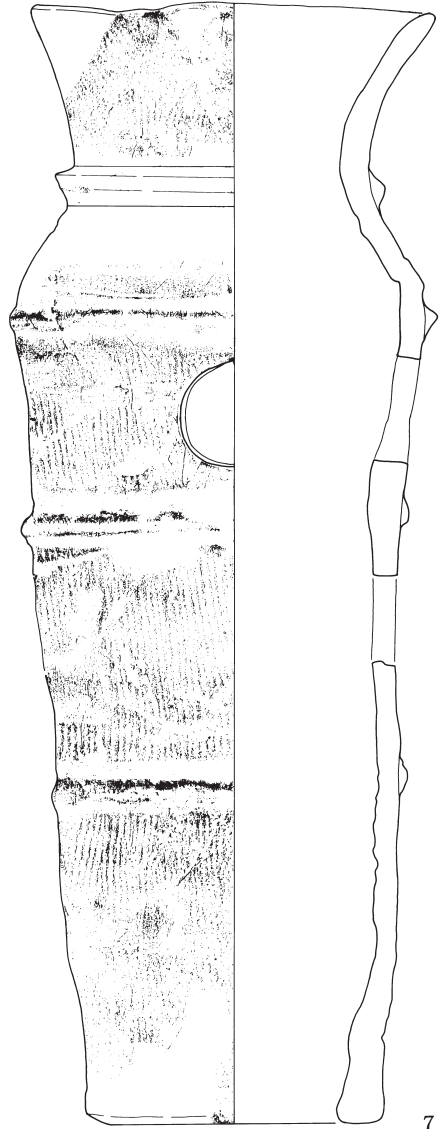
4

0 10cm

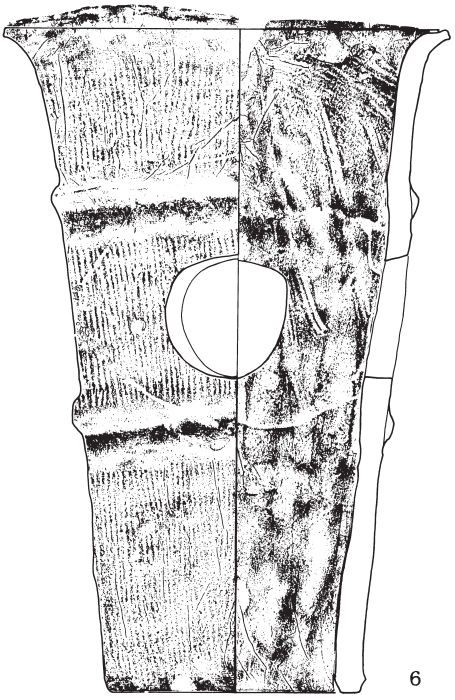
第26図 第3トレンチ出土遺物(1)



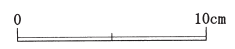
5



7



6



第27図 第3トレンチ出土遺物(2)

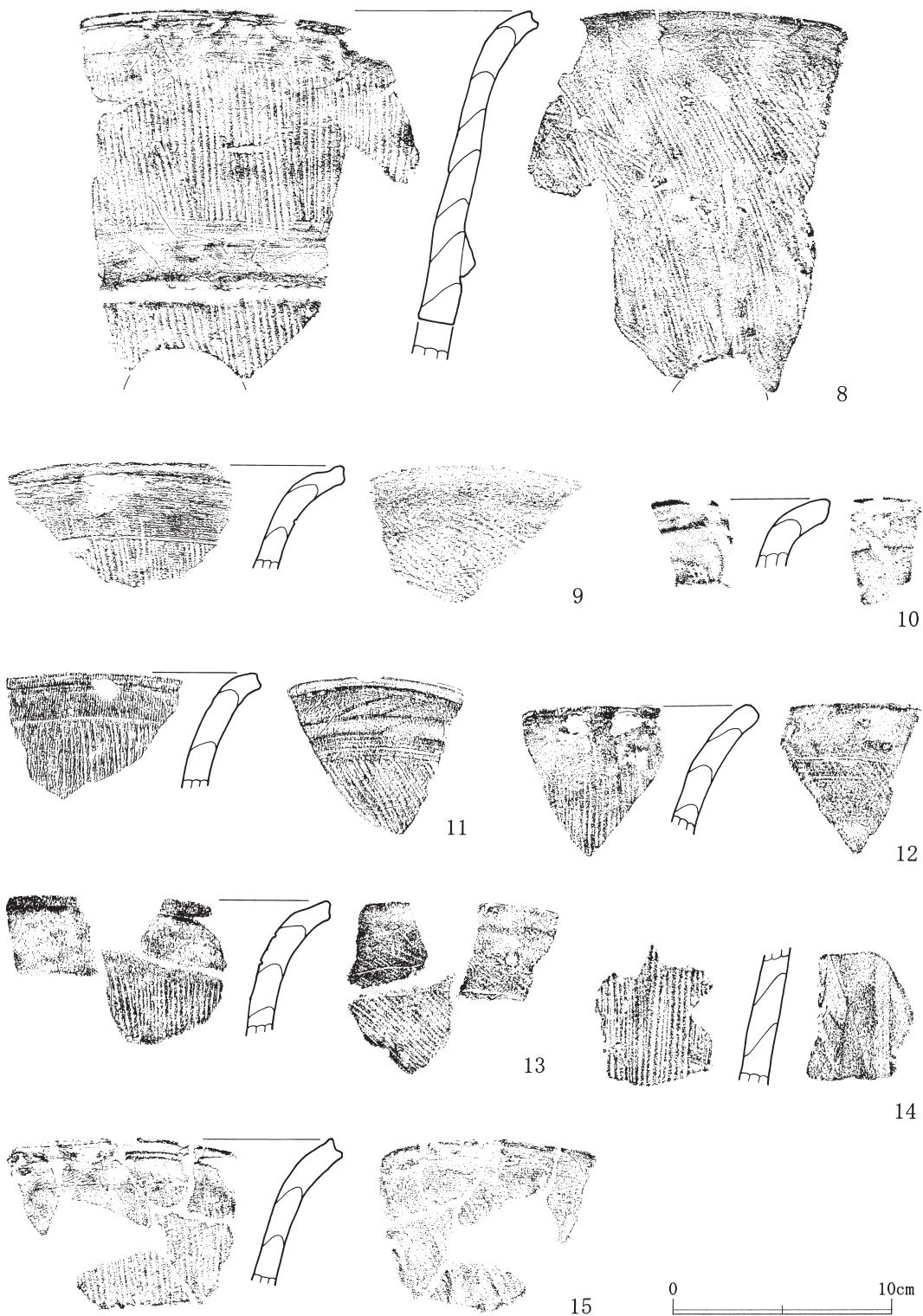
孔が認められることから3条4段の普通円筒埴輪と考えられる。口縁部付近器外面には上位が欠損しているため明らかではないが、「ハ」字上のヘラ描きが施されている。第1凸帯までの高さは14.0cm測り、凸帯部断面形態は台形状を呈する。器表面の調整は、外面が縦位刷毛目調整であるが、第2凸帯の上位で縦位刷毛目が止まっている部位が見受けられることから、上半部と下半部での調整工程に時間差があるものと考えられる。内面調整は胴下位から口唇部付近までがやや角度を持った縦位のナデ、より上位は斜位の刷毛面が施されている。刷毛目ピッチは1cmあたり6本を数える。

No.4は、底部から第3段までの破片である。遺存する第3段に透孔が確認されないため、3条4段か2条3段の普通円筒埴輪かは不明である。第1凸帯までの高さは12.0cm測り、凸帯部断面形態は中央がわずかに窪む台形状を呈する。器表面の調整は、外面が縦位刷毛目調整である。内面は縦位のナデを施し遺存する上位部分には、斜位に刷毛目が認められる。刷毛目ピッチは1cmあたり3本を数える。

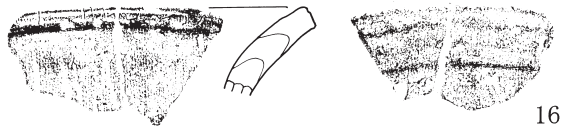
No.5は、口縁部から胴部にかけての破片である。合計3段分に亘るものであるが、透孔が確認されないため、3条4段か2条3段の普通円筒埴輪かは不明である。凸帯部断面形態は下稜が不明瞭な三角形形状を呈する。器表面の調整は、外面が縦位刷毛目調整である。内面は縦位のナデを施し、より上位部分には、斜位の刷毛目が認められる。刷毛目ピッチは1cmあたり4本を数える。

No.6は、器高35.3cm、口縁部直径23.5cm、底部直径14.0cmを、また第1凸帯までの高さは14.0cm測り、1段長／器高比は39.6%である。口端部は中央に窪みを有し、上・下端部は肥厚しわずかに突出する。口唇部は大きく外反し、内面は平坦面状を呈する。凸帯部断面形態は、変換点は明確でない蒲鋒状を呈する。底部外端部は、やや外側に突出し、底部調整は、内面に刀子削りが施されている。器表面の調整は、外面が縦位刷毛目調整、内面は底部から中位が縦位のナデが、第2凸帯部付近から上位には斜位の刷毛目が施された後、第1凸帯と第2凸帯の中央付近から、工具の一隅付近を用いた幅の狭い刷毛目が、縦位方向に施されている。口唇部は内外ヨコナデが施されている。第2段に上方が直線を呈する半円状の透孔が穿たれている。刷毛目ピッチは1cmあたり3本を数える。本遺物は、今回得られた資料の大半が暗赤橙褐色を呈する中で、淡褐色を呈するものである。資料No.56は別個体の破片であるが、底部調整は内面に刀子削りが施され、同様の色調を呈し、両資料とも、胎土には絹雲母片岩とともに白色針状物質（海面骨針）が観察され、またNo.39・50も同様の色調から同工品あるいは同工集団による制作が考えられるものである。

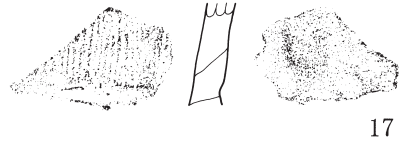
No.7は、朝顔形埴輪である。口縁部を欠損している。遺存する最上位部は剥落しており偽口縁状を為し、器内面には斜方向のヘラによる刻みが施されている。また幅2mmほどの半円形の穿孔が4箇所認められる。この刻みは、一定の乾燥工程の後の作業の再開に際し、積み上げる粘土の接着を強固にするために施されたものであろう。凸帯部断面形態は下稜が不明瞭な三角形形状を呈する。器表面の調整は、外面が縦位刷毛目調整である。内面は台部が縦位のナデ、壺形胴部および頸部中位は斜位のナデ、頸部上位は横位に近い斜位の刷毛面が施されている。第2段および第3段に2孔1対の半円の透孔が、90°角度を異にするように穿たれている。この透孔は他の3条4段の普通円筒埴輪に比べ大型である。刷毛目ピッチは1cmあたり4本を数える。胎土には絹雲母片岩と白色針状物質（海面骨針）が観察される。



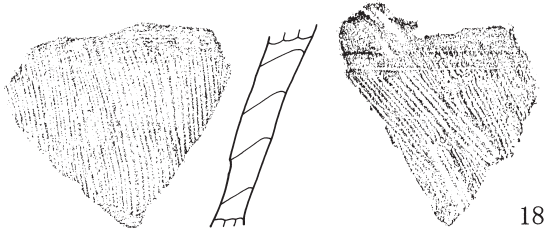
第28図 第3トレンチ出土遺物 (3)



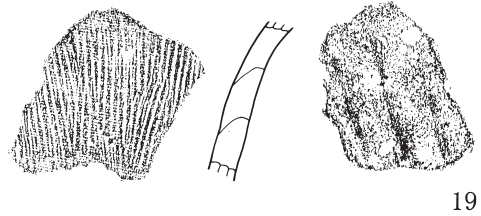
16



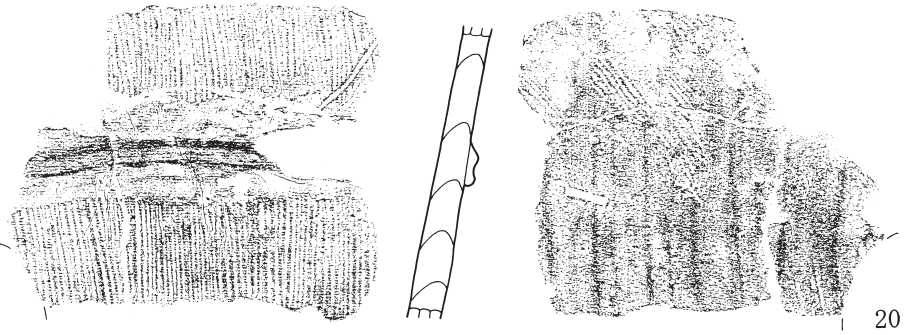
17



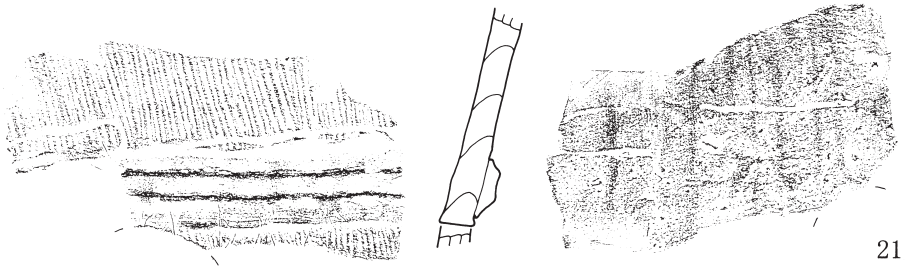
18



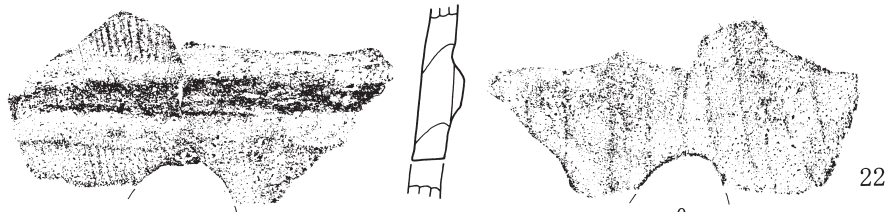
19



20



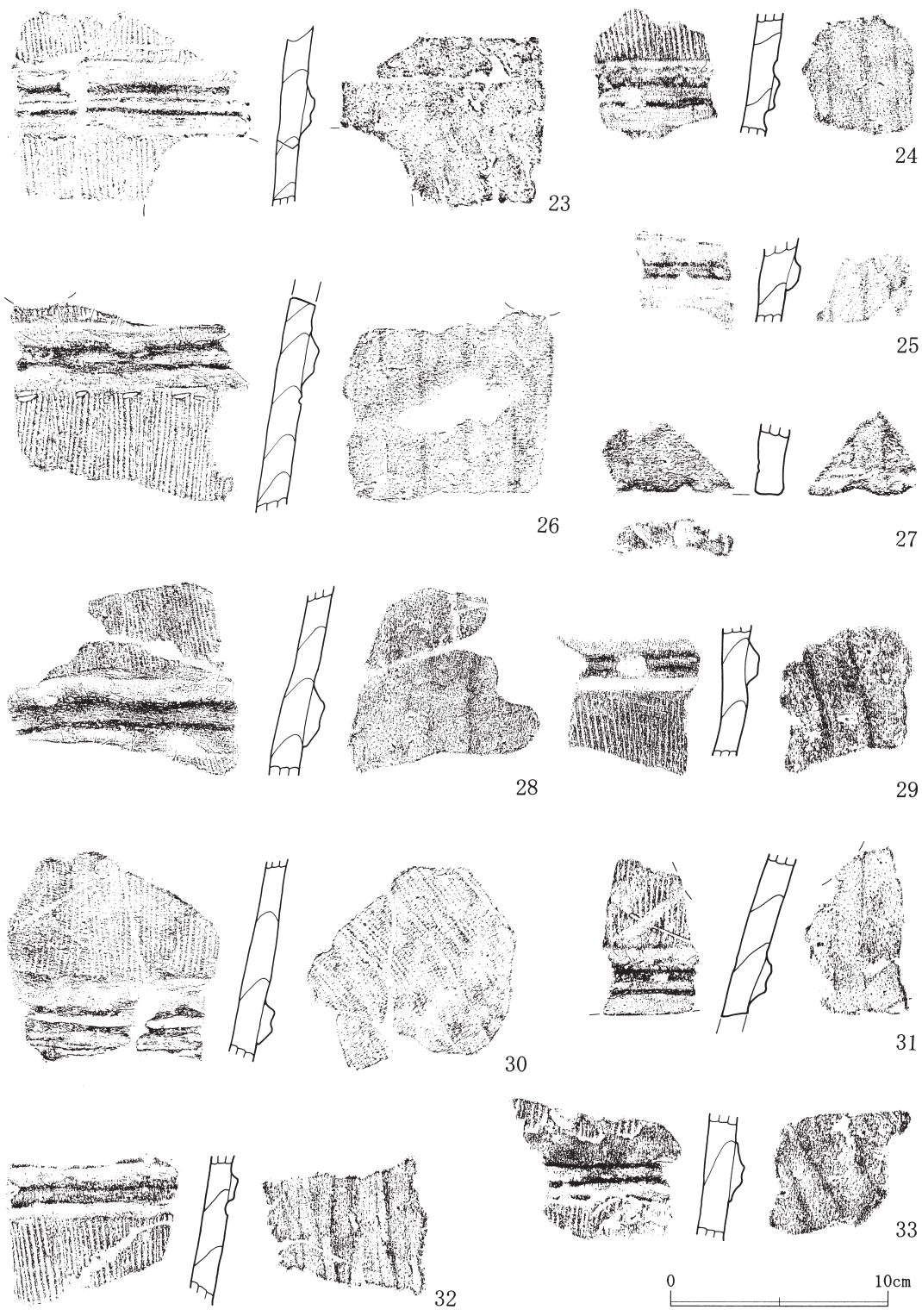
21



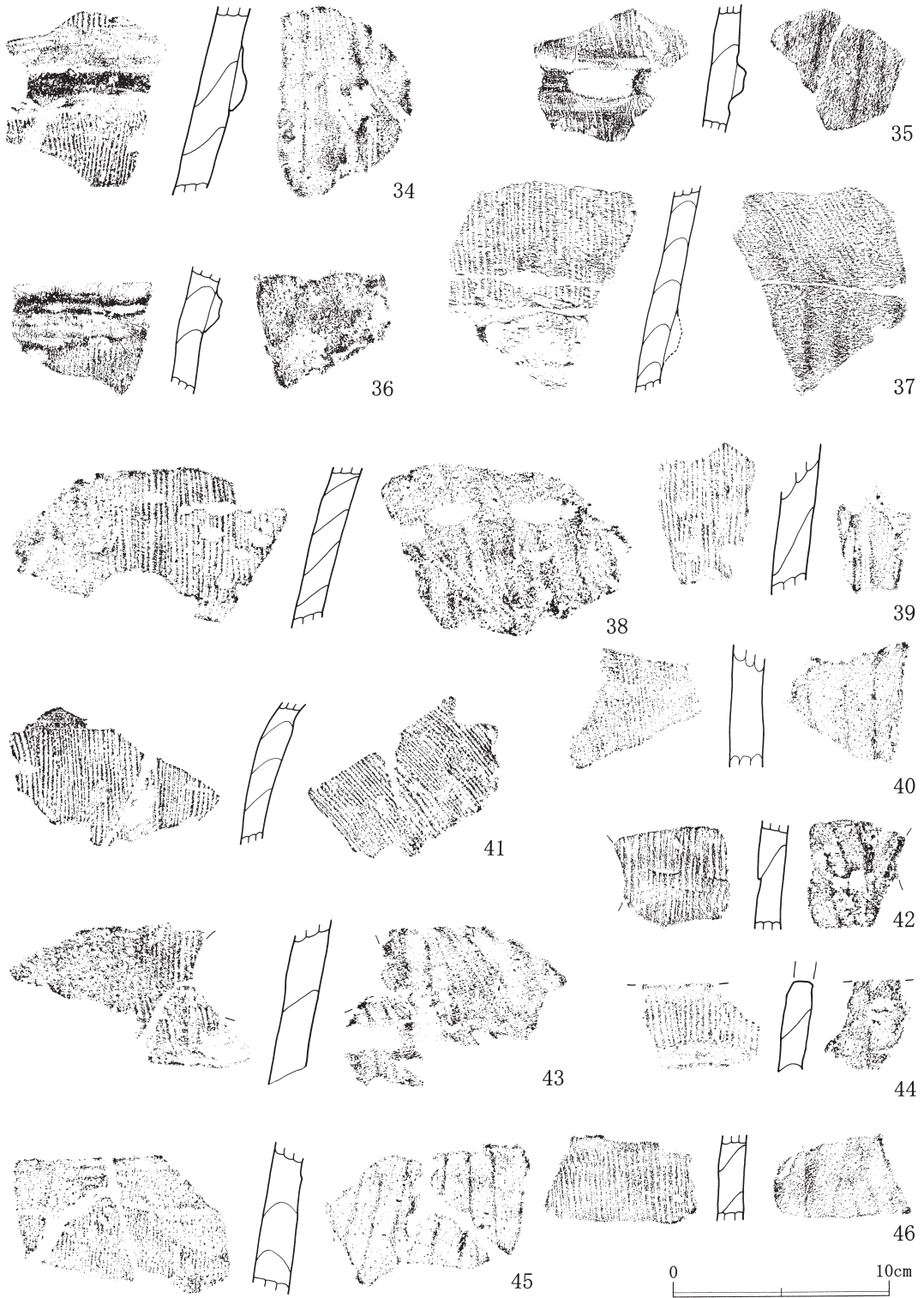
22

0 10cm

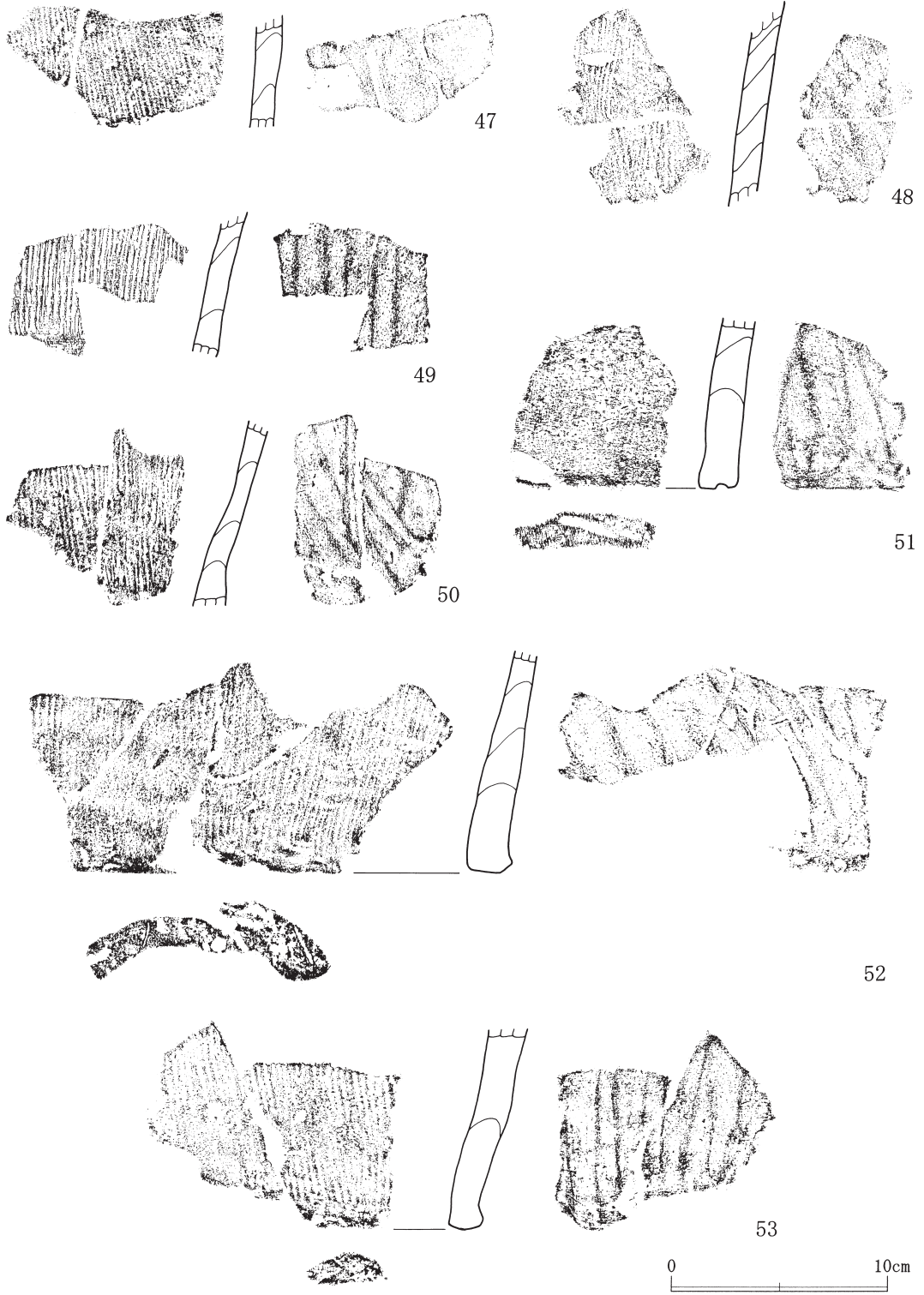
第29図 第3トレンチ出土遺物(4)



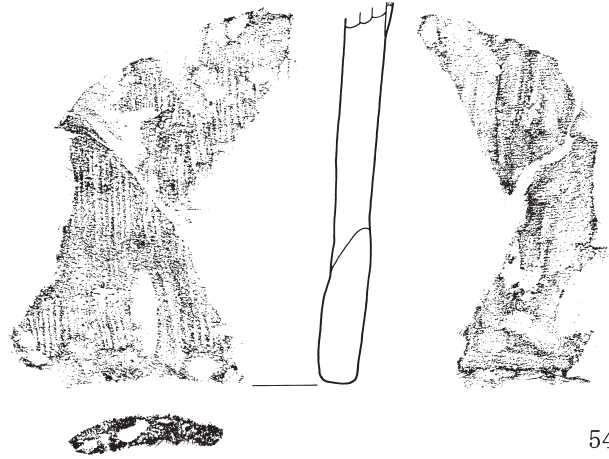
第30図 第3トレンチ出土遺物（5）



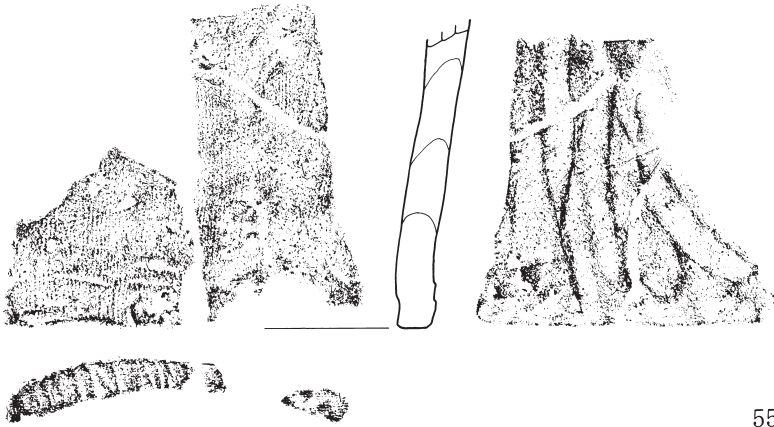
第31図 第3トレンチ出土遺物(6)



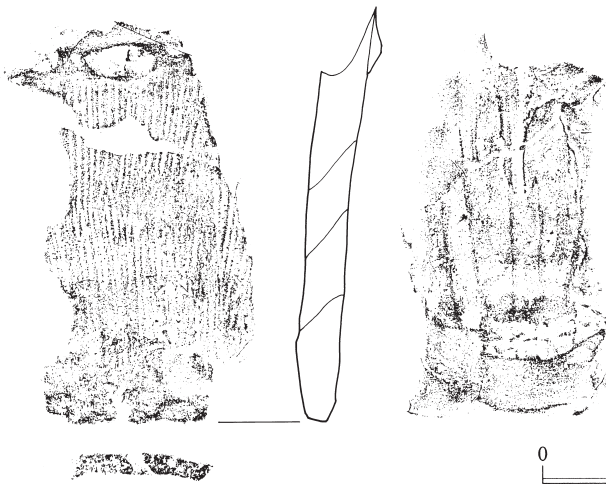
第32図 第3トレンチ出土遺物（7）



54



55



56



第33図 第3トレンチ出土遺物(8)

以下は各部位の破片資料における形態的な特徴について触れてみたい。口縁端部形態は、端部中央が窪むもの（No.8・11・15）、端部中央がわずかに窪み上部が上方へ鋭角的に突出するもの（No.9・13）、端部が面状をなし上部が上方へ鋭角的に突出するもの（No.10）、端部が丸みを帯びるもの（No.12）が認められる。凸帯部断面形態は台形状をなすもの（No.22・29・35）、三角形状を呈するもの（No.56）が少量認められるが、大半は中央部がやや窪む台形状のものである。底部調整は、先に触れた淡褐色を呈する色調のもののみ内面ヘラ削りが認められるのである。刷毛目ピッチは、1 cmあたり3ないし4本のもものが大半であるが、1 cmあたり6本を数えるものも少量ながら認められる（No.18）。また今回図示しなかった資料には、1 cmあたり7本を数えるものも少量ながら認められた。透孔の位置は、大半のものは上下の凸帯の横位ヨコナデと重複しないものであるが、No.23の資料のように、上位のヨコナデを切って穿たれているものも少量ながら認められる。

（大熊季広）

2. その他の出土遺物

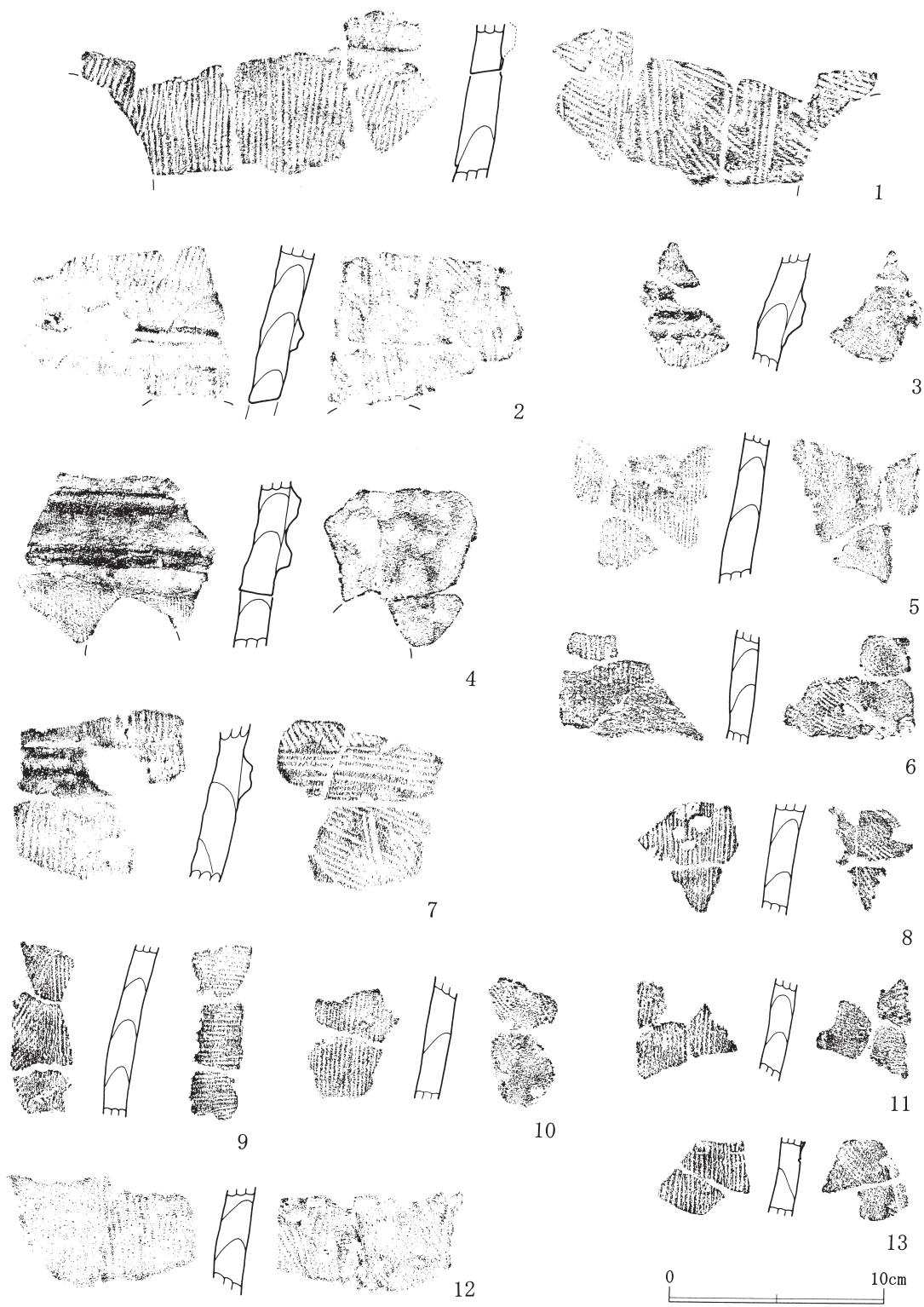
今回の調査では、第3トレンチ出土を主とする円筒埴輪の他に、他のトレンチや墳丘等より形象埴輪や須恵器の破片などの資料も出土あるいは採集されている。

形象埴輪は、人物・馬・家・鞍形埴輪と推測される破片が見られる（図版16-2）が、比較的少量である。いずれも小破片のため、その形状は不明である。図示できたのは、鞍形埴輪の2片で（第39図No21、第40図No22）、いずれも粘土紐による矢柄に線刻による鍔表現のものである。

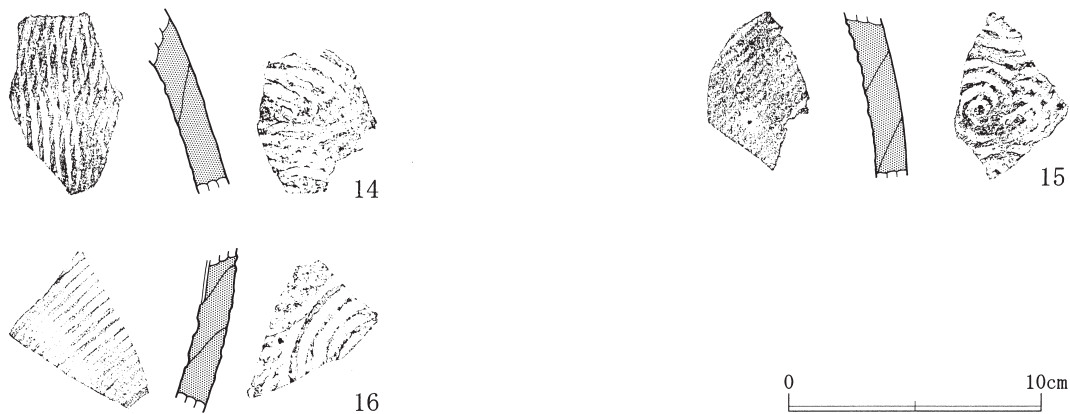
須恵器は、外面平行叩き、内面に当道具痕（青海波文・無文）を残す甕の破片が大半を占める。この中には、頸部と胴部の境に補強帯の凸帯を施す上野型の甕の破片（第36図No9）も見られる。これらの須恵器破片は、周溝内からの出土は少なく、第2トレンチ付近の墳丘上層から多く出土あるいは表採されている。

古墳時代以外のもものでは、中世の13世紀頃と推測される常滑窯系の片口鉢Ⅰ類の破片や、13世紀代と15世紀代の在地産片口鉢の破片（第40図No28・29）なども表採されており、本古墳周辺その後の開発状況を知る上で注目される。

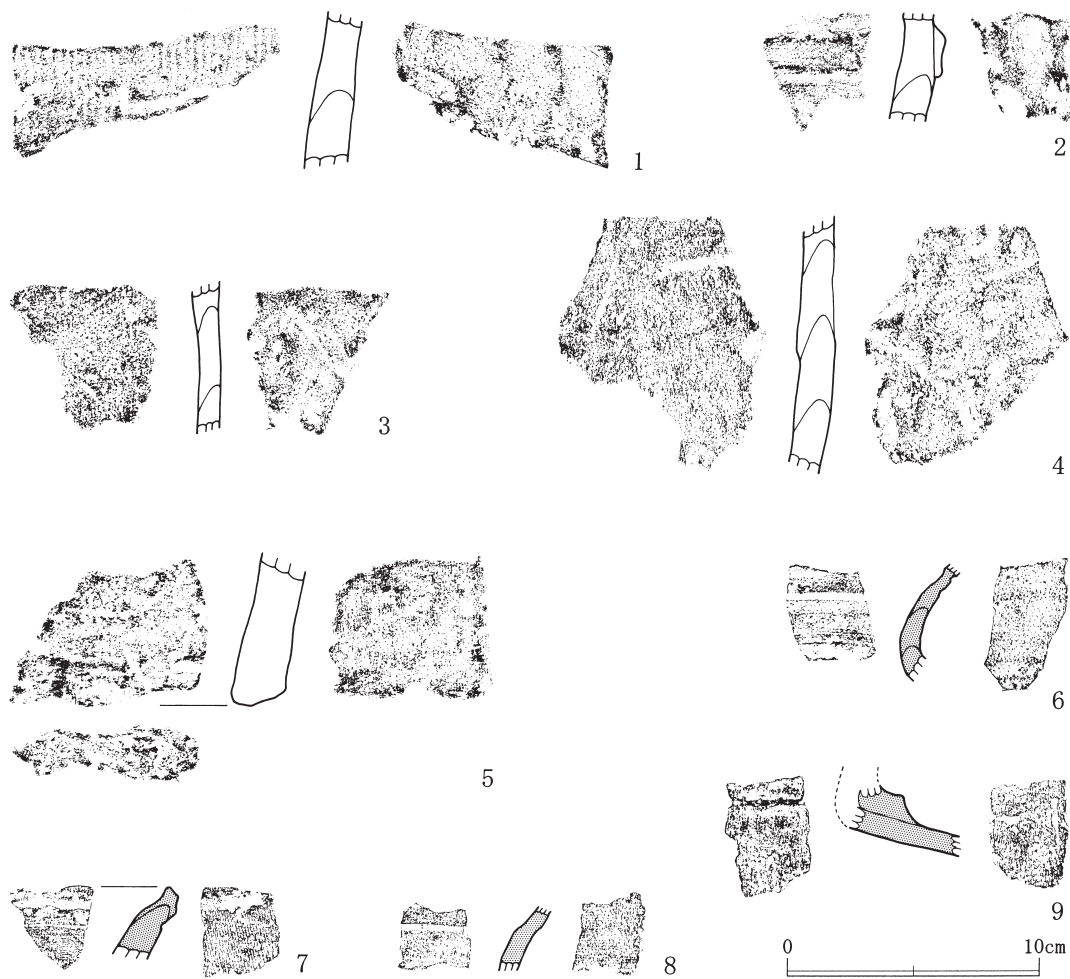
（恋河内昭彦）



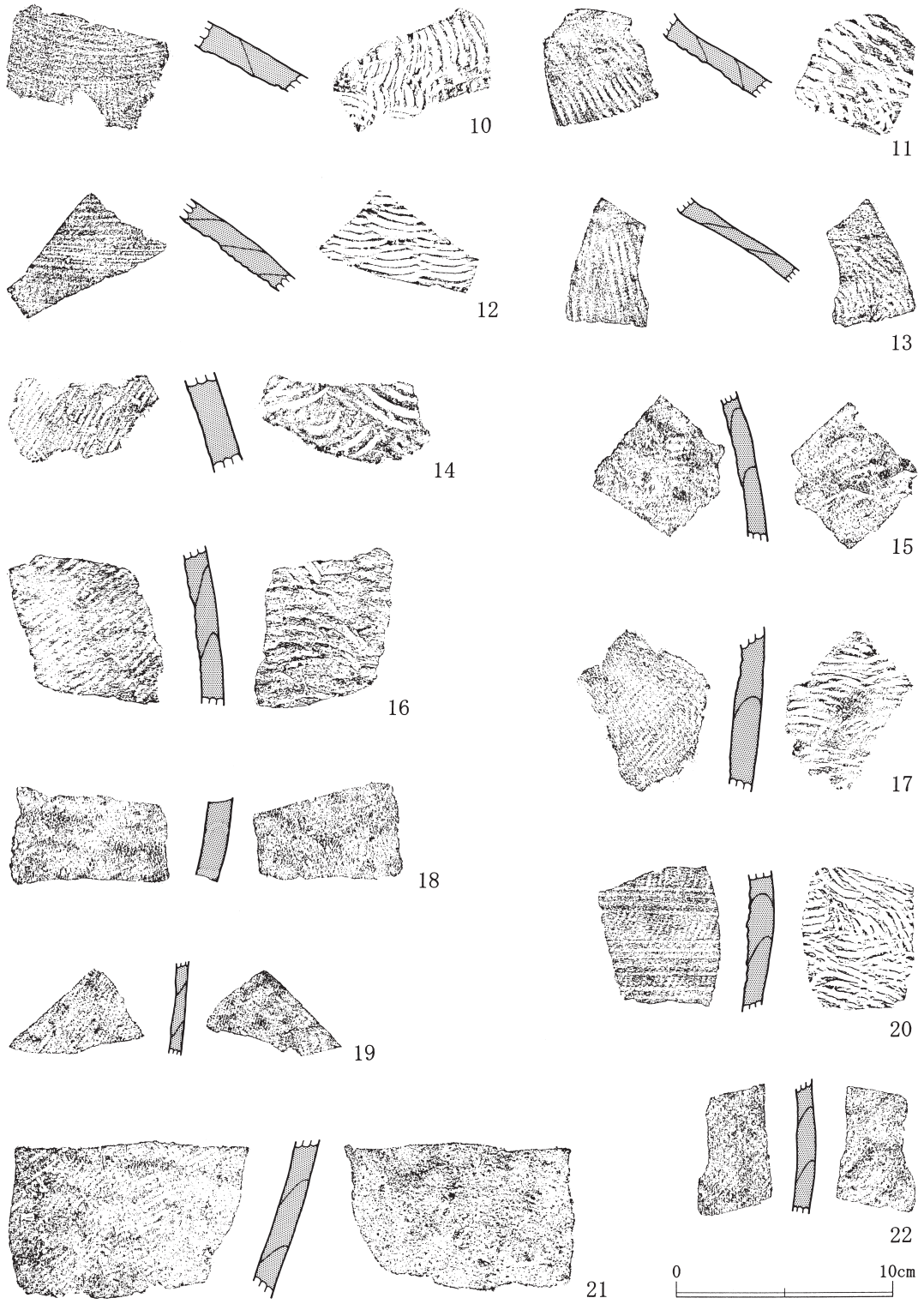
第34图 御沢地区周满内出土遺物（1）



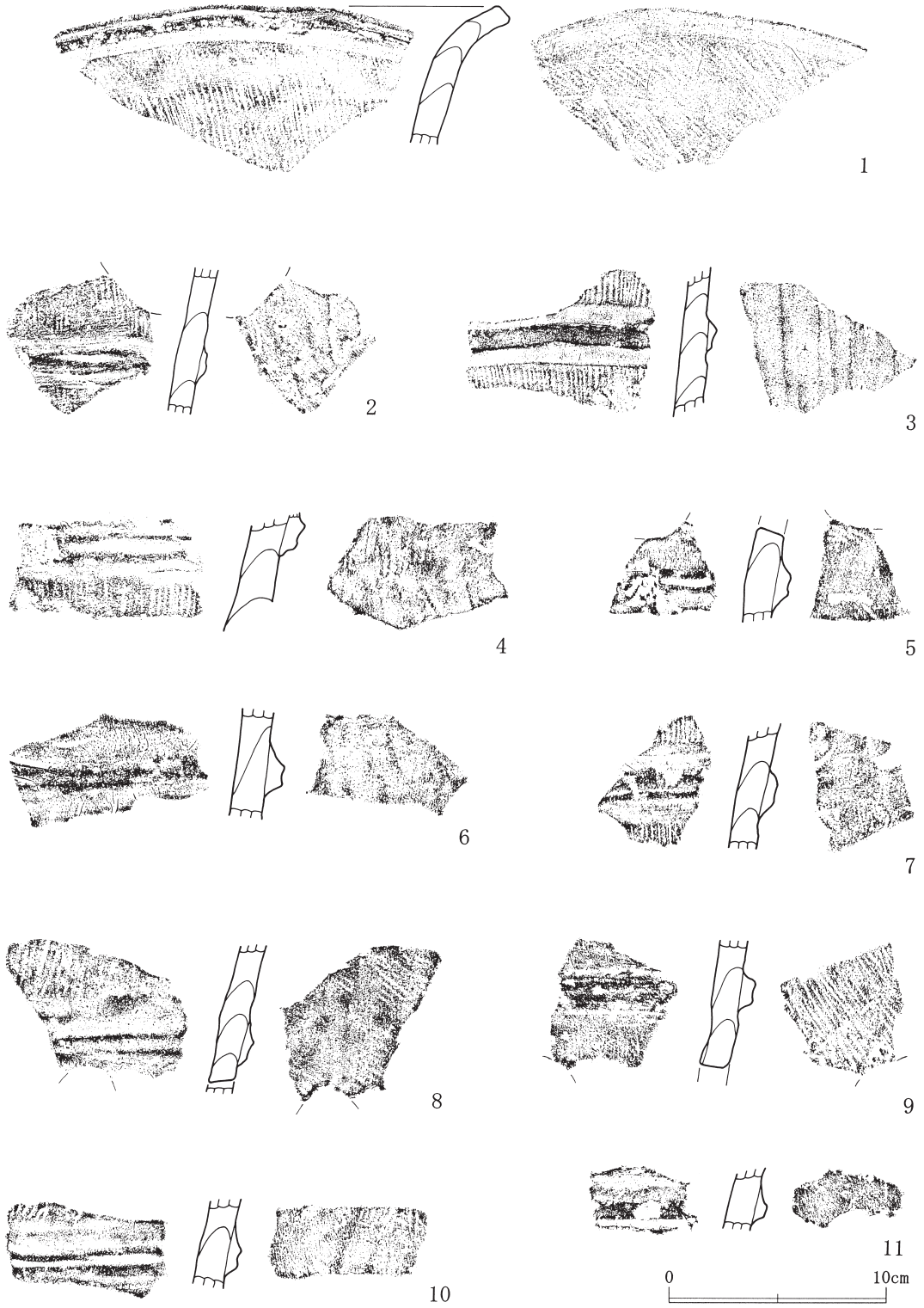
第35図 御沢地区周溝内出土遺物 (2)



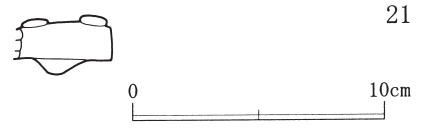
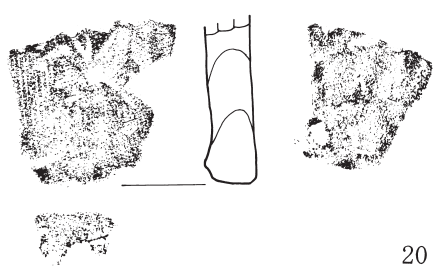
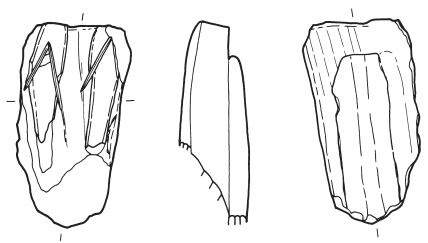
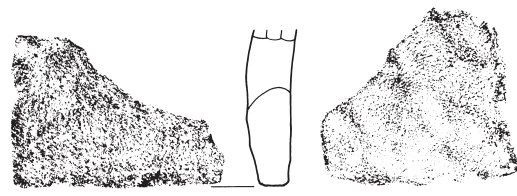
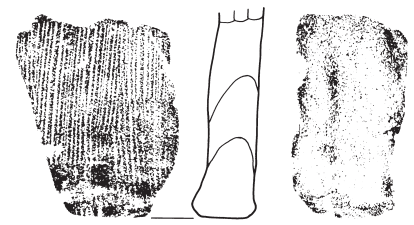
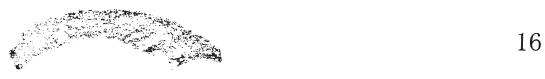
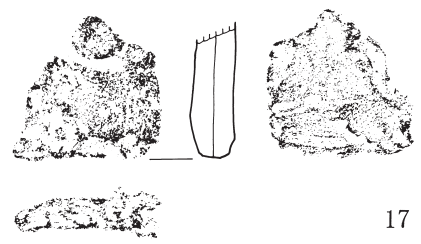
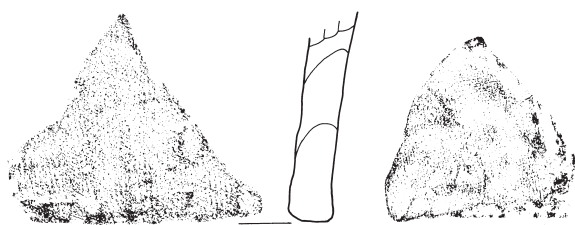
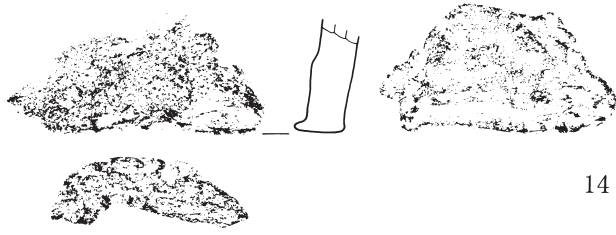
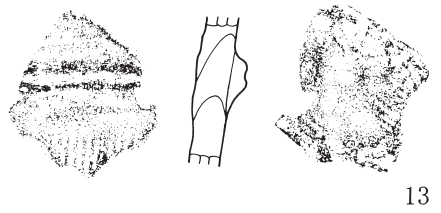
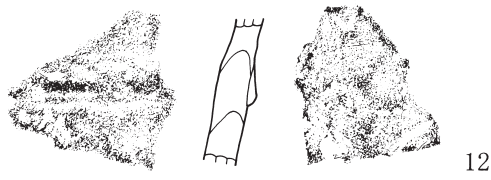
第36図 墳丘上層出土遺物 (1)



第37図 墳丘上層出土遺物 (2)



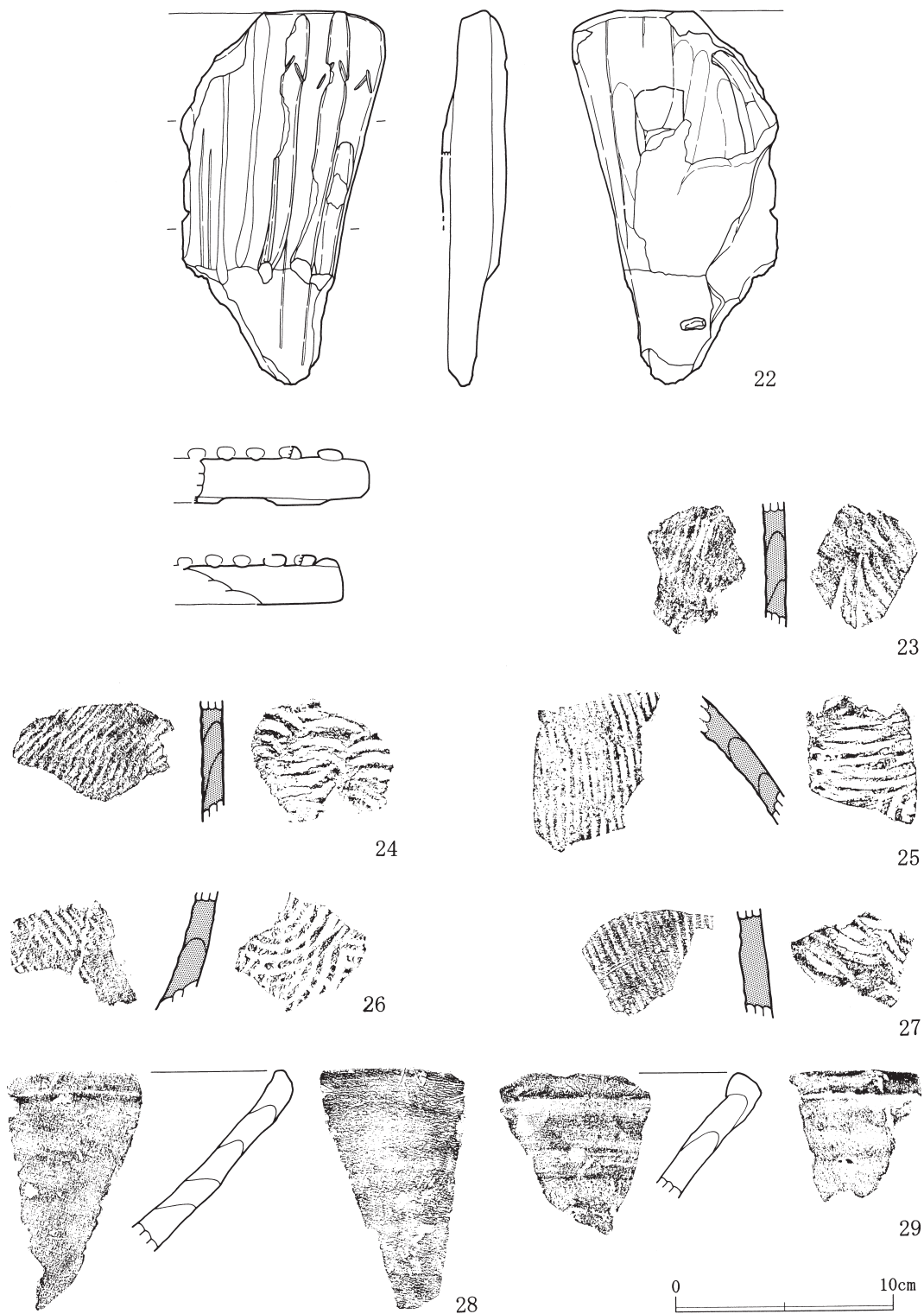
第38図 表採遺物 (1)



20

21

第39図 表採遺物 (2)



第40図 表採遺物 (3)

参 考 文 献

大熊 季広 (2003) 『長沖古墳群Ⅳ』 児玉町文化財調査報告書第37集

大熊 季広 (2004) 『長沖古墳群Ⅴ』 児玉町文化財調査報告書第38集

大田 博之 (2002) 『東五十子・川原町』 東五十子遺跡調査会

君島勝秀・大谷 徹 (1999) 『長沖古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第234集

恋河内昭彦 (1984) 「児玉町長沖古墳群の第7次調査」 『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』

埼玉考古学会他

埼玉 県 (1982) 『新編埼玉県史』 資料編2

鈴木 純 (1978) 『いぶき－塚本山古墳群分布調査報告－』 10号 埼玉県立本庄高等学校考古学部

菅谷浩之他 (1980) 『長沖古墳群』 児玉町文化財調査報告書第1集

菅谷浩之・駒宮史朗 (1973) 「生野山古墳群発掘調査概報」 『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』

埼玉考古学会、埼玉県遺跡調査会、埼玉県教育委員会

徳山寿樹・大熊季広他 (2002) 『長沖古墳群Ⅲ』 児玉町文化財調査報告書第36集

本 庄 市 (1976) 『本庄市史』 資料編

本 庄 市 (1986) 『本庄市史』 通史編Ⅰ

増田逸朗・小久保徹 (1977) 『塚本山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集

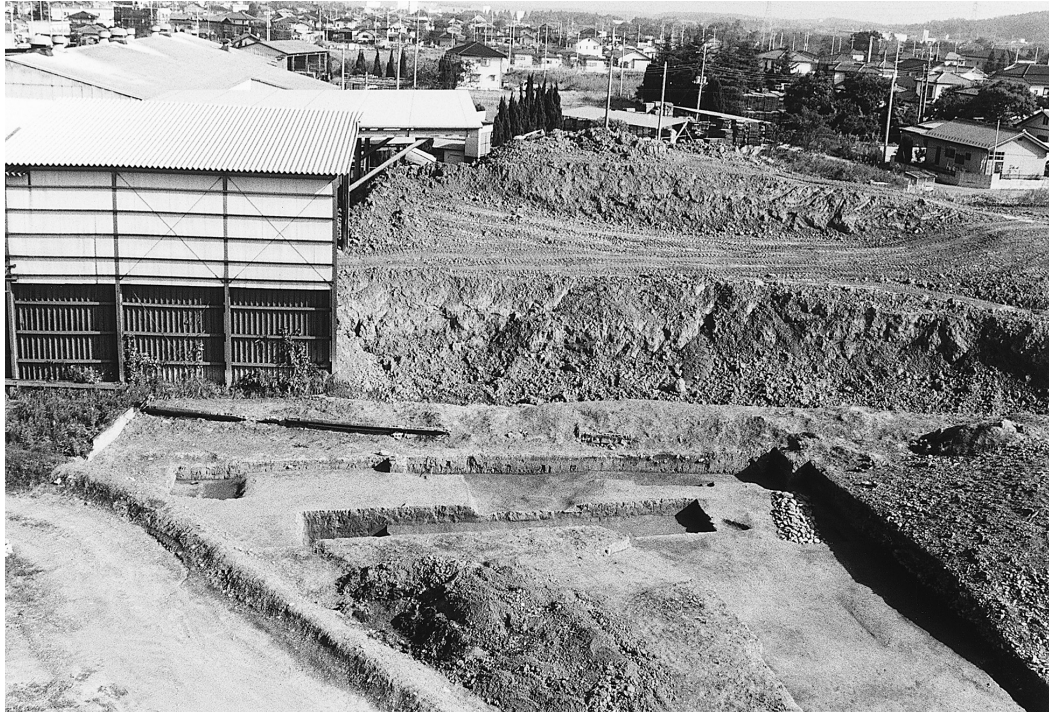
写真図版



1. 長沖第32号墳全景 (西より)



2. 長沖第32号墳全景 (西より)



1. 第1トレンチ (東より)



2. 第1トレンチ (南より)



1. 第2トレンチ全景



2. 第2トレンチ後部墳丘裾（後世の石垣）



1. 第3トレンチ (東より)



2. 第3トレンチ (西より)



1. 第3トレンチ (南より)



2. 第3トレンチ墳丘側周溝立ち上がり



1. 第3トレンチ遺物出土状態 (1)



2. 第3トレンチ遺物出土状態 (2)



1. 第3トレンチ遺物出土状態 (3)



2. 第3トレンチ遺物出土状態 (4)



1. 第3トレンチ遺物出土状態 (5)



2. 第3トレンチ遺物出土状態 (6)



1. 第4トレンチ (南より)



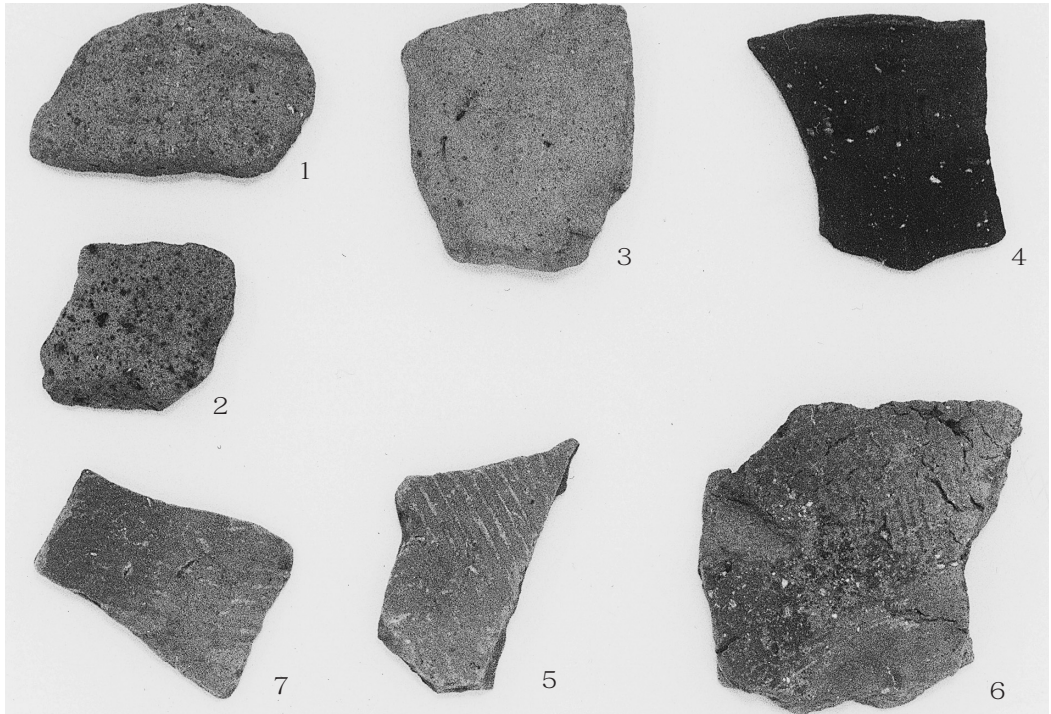
2. 第4トレンチ (北より)



1. 第5トレンチ



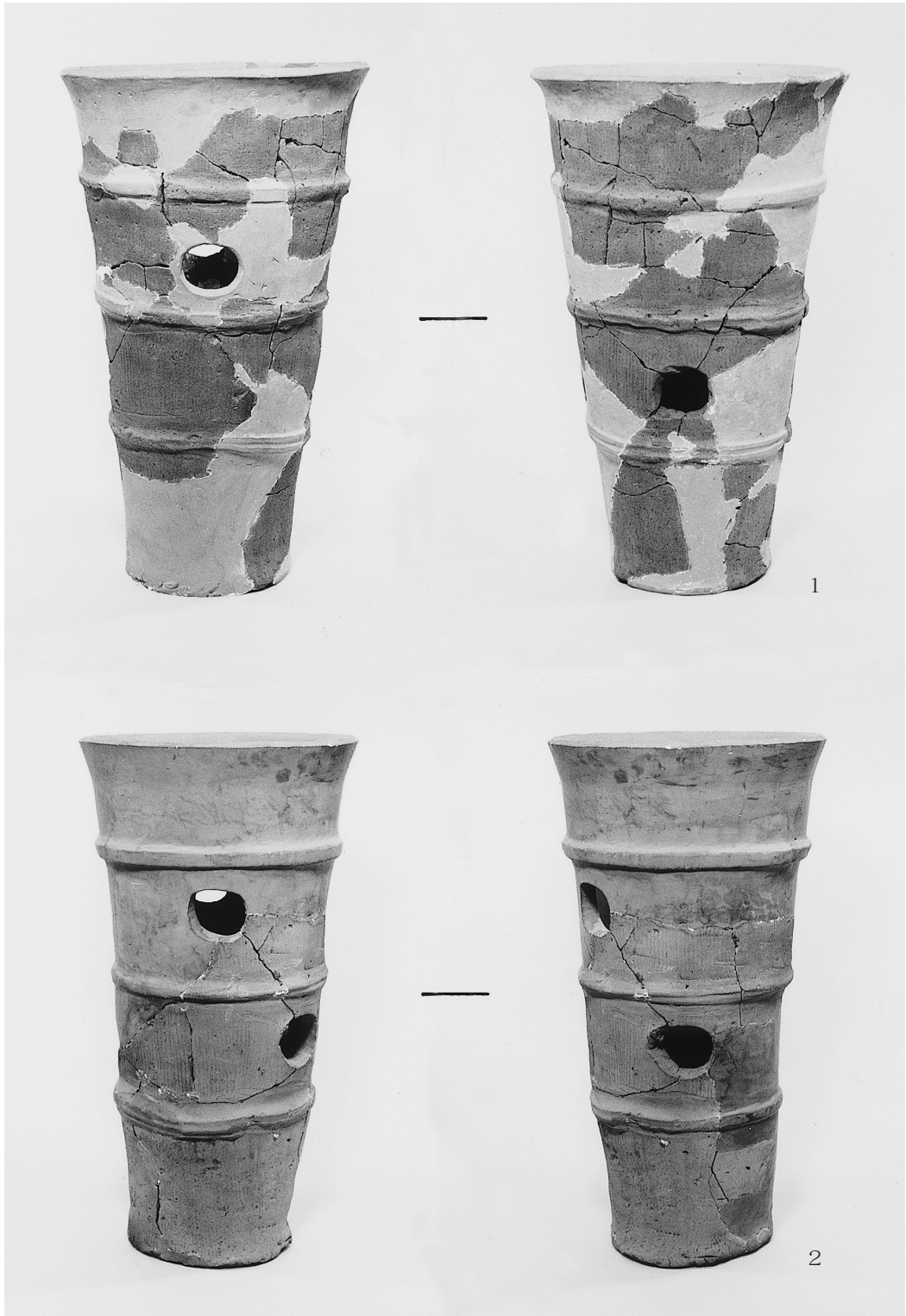
2. 第5トレンチ



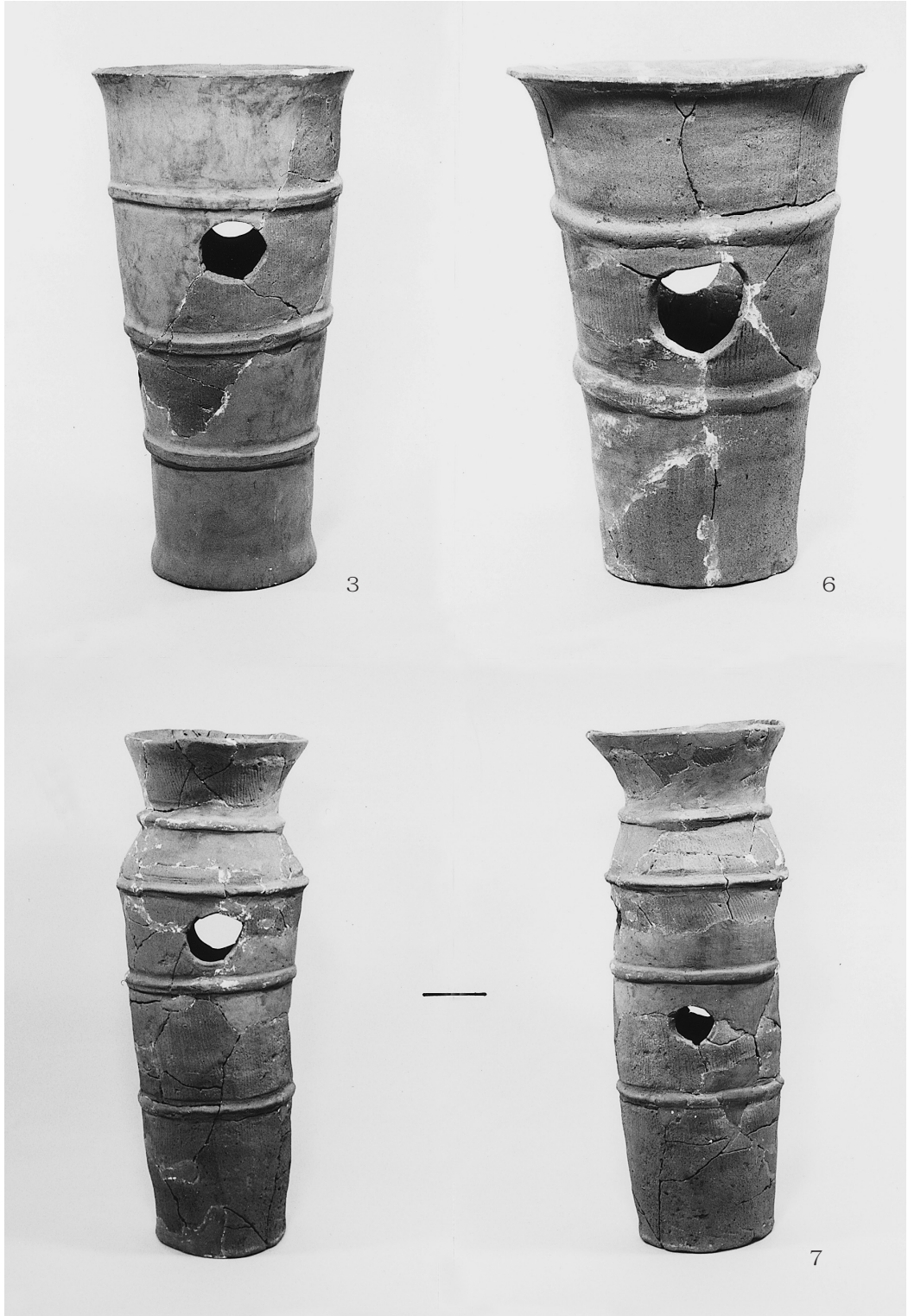
1. 第2トレンチ出土遺物



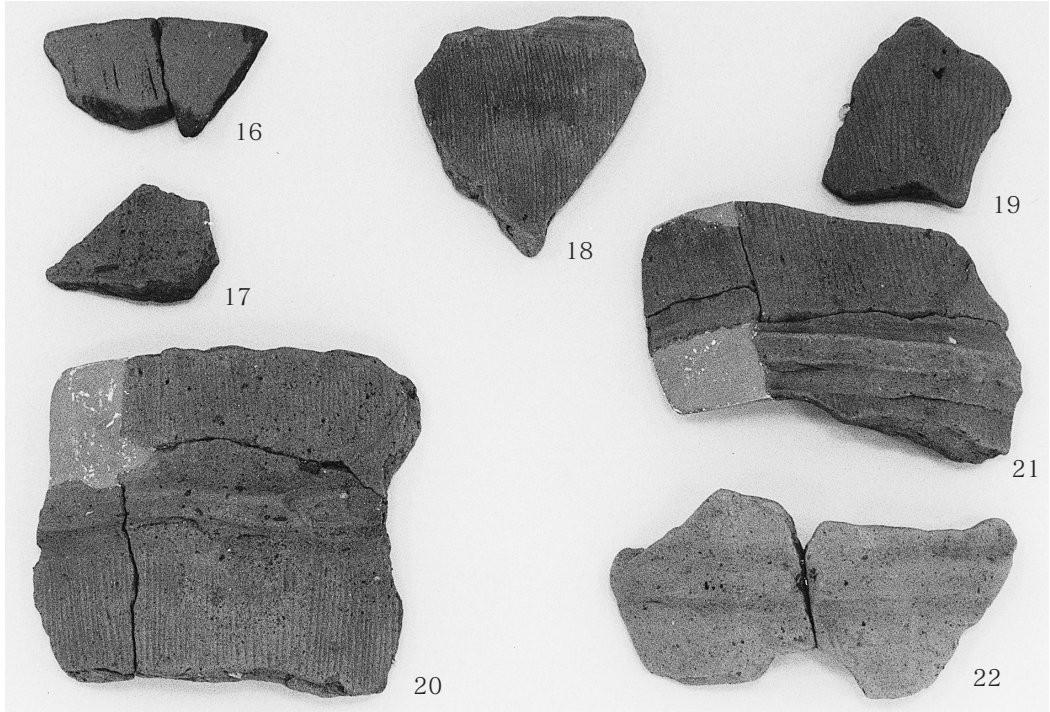
2. 第3トレンチ出土遺物 (1)



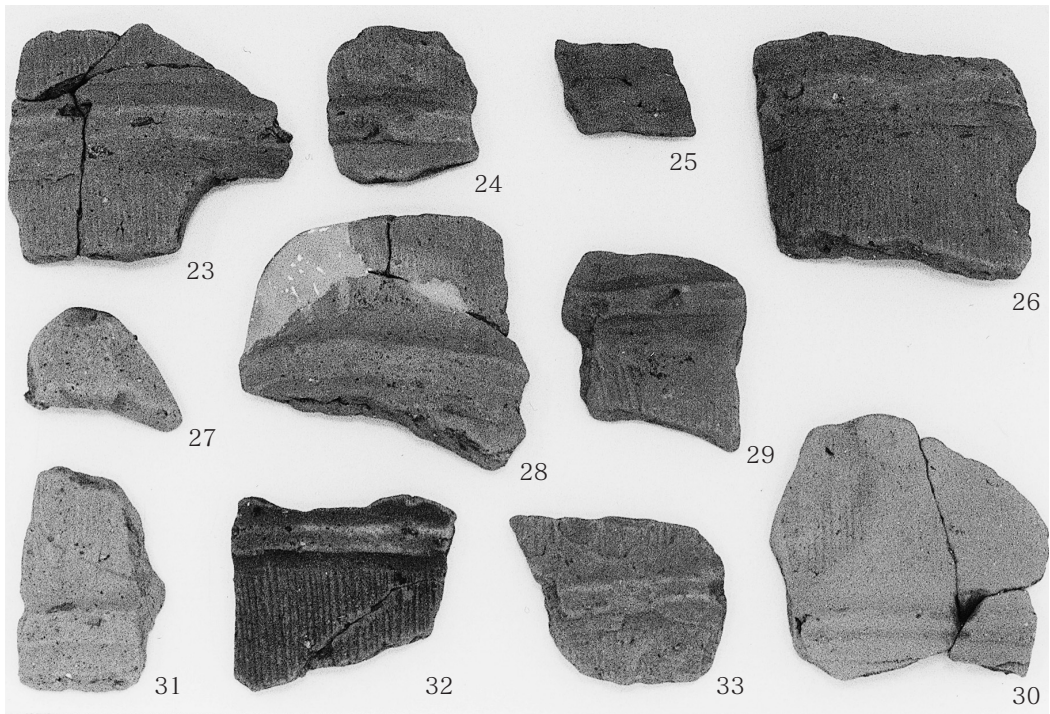
1. 第3トレンチ出土遺物 (2)



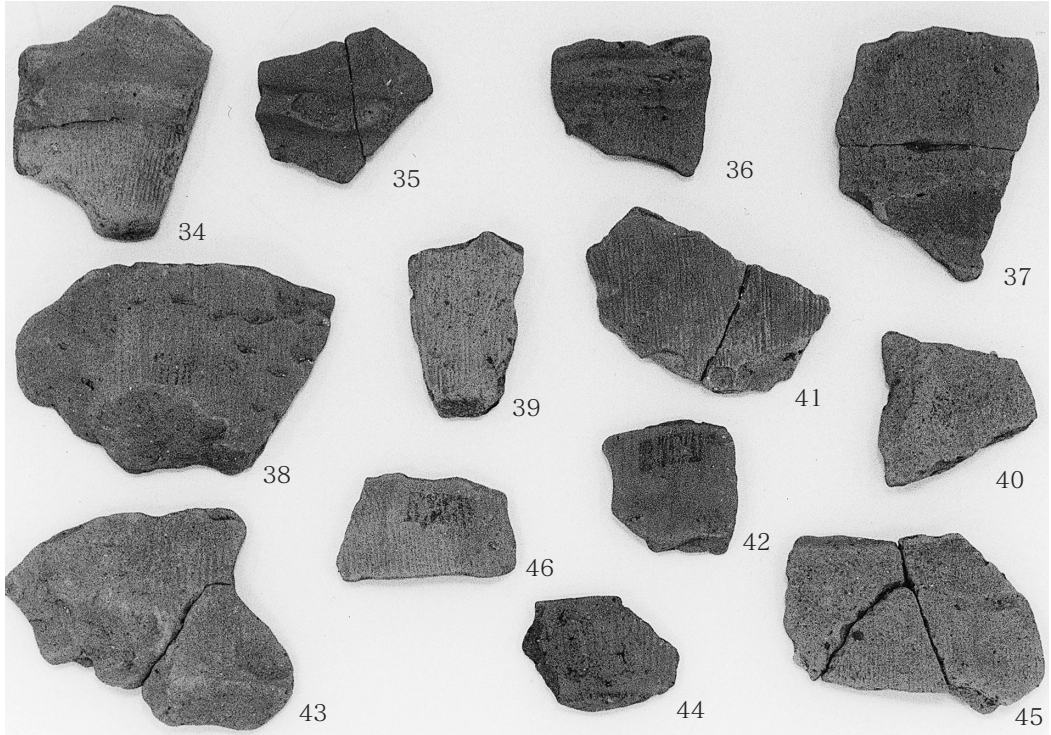
1. 第3トレンチ出土遺物 (3)



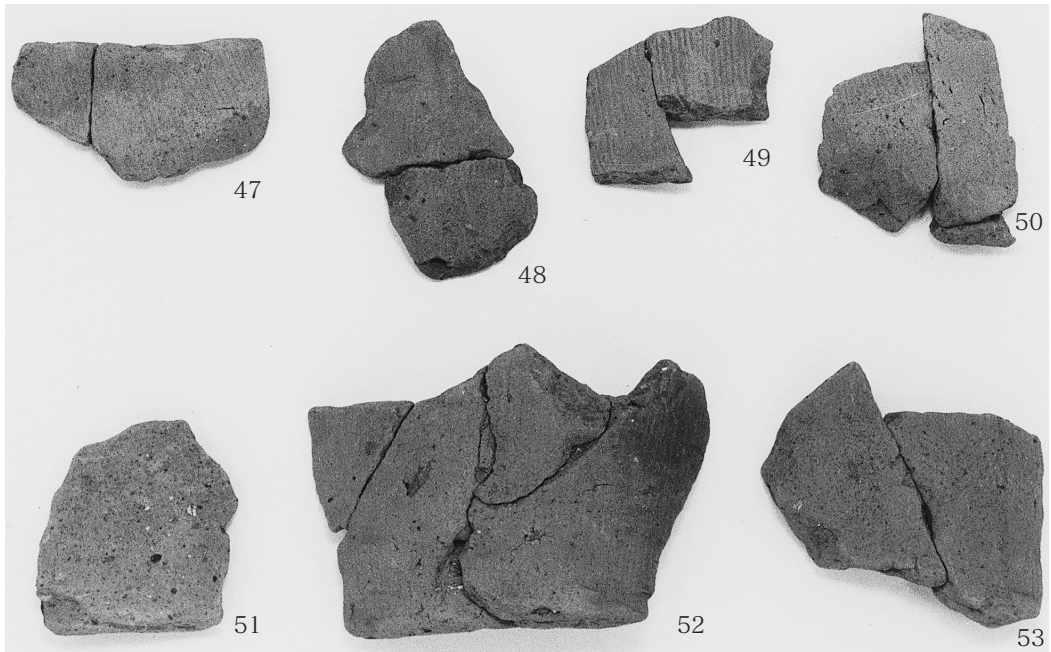
1. 第3トレンチ出土遺物 (4)



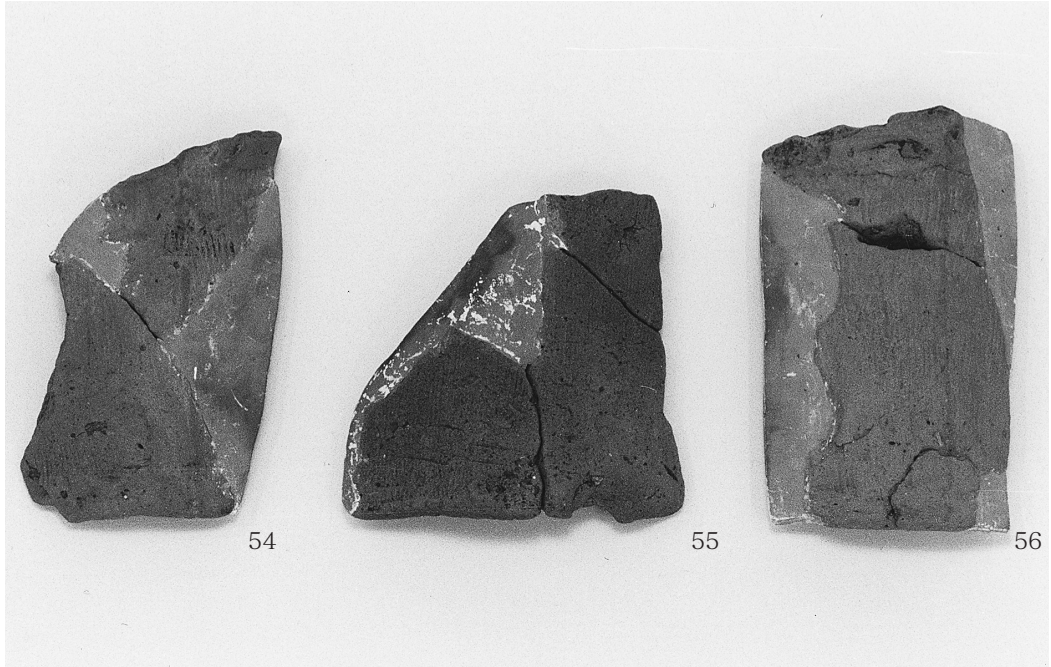
2. 第3トレンチ出土遺物 (5)



1. 第3トレンチ出土遺物 (6)



2. 第3トレンチ出土遺物 (7)



1. 第3トレンチ出土遺物 (8)



2. 表採資料 (形象填輪)



1. 円筒埴輪外面調整 (第3トレンチ出土No2)



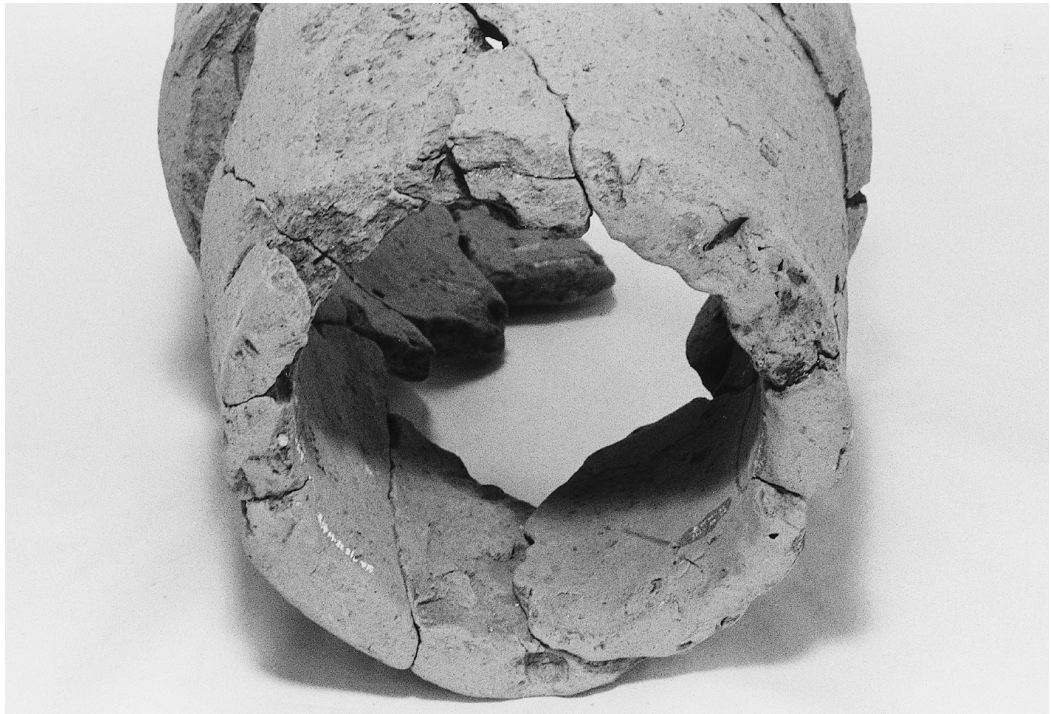
2. 朝顔形埴輪外面調整 (第3トレンチ出土No7)



1. 円筒埴輪内面調整 (第3トレンチ出土No6)



2. 円筒埴輪内面調整 (第3トレンチ出土No2)



1. 円筒埴輪底部調整 (第3トレンチ出土No6)



2. 朝顔形埴輪底部調整(第3トレンチ出土No7)

報告書抄録

フリガナ	ナガオキコフンダン VI ーダイ32ゴウフンノチョウサー							
書名	長沖古墳群 VI ー 第32号墳の調査 ー							
副書名								
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書					巻次	第2集	
編著者	恋河内昭彦、大熊季広							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495(25)1185							
発行日	2006(平成18)年3月20日							
フリガナ 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡					
ない、こふん 第32号墳	本庄市児玉町 長沖303-1	112119	139	36° 11'5"	139° 7'56"	20030714 ゝ 20031031	150	範囲確認
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
第32号墳	古墳	古墳時代後期	周溝		埴輪、須恵器片			

組 織

発掘調査 (平成15年度)

主体者 児玉町教育委員会
 教育長 富 丘 文 雄
 事務局 社会教育課
 課 長 清 水 満
 課長補佐 永 尾 清 一
 文化財係長 鈴 木 徳 雄
 主 任 恋河内 昭 彦
 主 事 徳 山 寿 樹
 担当者 主 事 大 熊 季 広
 " 主 事 松 澤 浩 一

整理報告書（平成17年度、平成18年1月9日まで）

主体者 児玉町教育委員会
教育長 雉岡 茂
事務局 社会教育課
課長 笠原 義晴
課長補佐 鈴木 徳雄
文化財係長 恋河内 昭彦
主任 徳山 寿樹
担当者 主 事 大熊 季広
" 主 事 松澤 浩一

整理報告書（平成17年度、平成18年1月10日より）

主体者 本庄市教育委員会
教育長 福島 巖（平成18年2月17日まで）
教育長 茂木 孝彦（平成18年2月18日より）
事務局 事務局長 掛斐 龍一
文化財保護課長 前川 由雄
課長補佐兼埋蔵文化財係長 鈴木 徳雄
主査 太田 博之
担当者 主査 恋河内 昭彦
" 主 事 松澤 浩一
臨時職員 松本 完行
臨時職員 的野 善行

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第2集

長 沖 古 墳 群 VI

—第32号墳の確認調査—

印刷 平成18年3月20日
発行 平成18年3月20日

編集機関 本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356番地